

『決定往生集』 訳註（二）——第二正果決定・第三昇道決定・第四種子決定——

服 部 純 啓

【抄録】

本稿は、珍海（一〇九二～一一五二）撰『決定往生集』諸本のうち現時点では最良の本文を提供すると見られる、奈良県立図書館所蔵「元禄九年版本」の、正果決定から種子決定までの訓読と現代語訳である。『決定往生集』の諸本については、坂上雅翁「決定往生集」諸本攷」（『淑徳短期大学研究紀要』第三〇号、一九九一、淑徳短期大学）等を参照されたい。また、坂上「禅林寺本『決定往生集』の研究（一）」（『淑徳短期大学研究紀要』第三二～三四号、一九九三～一九九五）において「禅林寺本」の翻刻、訓読がなされているが、管見の限りでは、本稿が現代語訳を試みるものとしては初めてである。作業の過程で佛教大学、本庄良文教授に週一回の訓読、現代語訳の読み合わせ、添削のご指導を賜った。また佛教大学、南宏信先生には、本稿の構成についてご指導を賜った。また、奈良県立図書館には、貴重な資料の閲覧、複写を許可頂き、本稿掲載に關しても格別のご配慮を賜った。御礼申し上げる次第である。今後、第五修因決定以降の

続編を寄稿予定である。

キーワード…珍海、『決定往生集』、正果決定、昇道決定、種子決定

【凡例】

- 一、底本（底）は奈良県立図書館所蔵、元禄九（一六九六）年版本を使用する。
- 一、校本には左記の資料を用いた。
 - ①…寛文五（一六六五）年版、（※宝永七（一七一〇）年版も同じ版木であるため本稿では記載しない。）
 - ②…『大正新修大藏經』第八四卷所収本
 - ③…『浄土宗全書』第二五卷所収本
- 一、本稿は、上段から校異、訓読、現代語訳の順で掲載する。
- 一、訓読の本文中に元禄版（丁数、左右）を記す。
- 一、末尾に底本の複写を添付し、下部には丁数（○丁右、○丁左）を

記載する。

一、註記の後に【補註】を設ける。

一、訓読の本文中に元禄版の（丁数・左右）を記す。

一、問答箇所は、現代語訳に【問】・【答】と適宜記載した。

一、底本に基づき旧字は改変せず訓読を行ったが、異体字は環境の許す限り正字に改めた。現代語訳には原則常用漢字を使用した。

<p>①底「華」ⒶⓈ 「花」 ②底「華」Ⓐ 「花」 ③底「華」Ⓐ 「花」 ④底「敷」Ⓢ 「開」 ⑤底「華胎」Ⓢ ⑥底「如雙卷經說之」Ⓐ「如雙卷經說也」</p>	<p>第二に正果決定とは、『大經』の三輩、『觀經』の九品、並びに云ふ。「行者命終の時に臨みて、佛の來迎を見る。或は蓮華①を見、或は夢中に佛を見、或は見ざる者有り。即ち七寶池中の蓮華②の上に於て自然に身を受く。中に於て勝れたる者は生ずれば即ち花開け、劣なる者は開けず。此の人、或は五百歳、或は十二劫を経て、蓮華③乃ち敷④き、華⑤胎の中に於て、諸の快樂を受くること忉利天の如し。而れども佛を見ず。また法を聞かず。（十丁左）故に彼の國に於て謂ひて胎生と爲す」と。へ『雙卷經』にこれを説くが如し。⑥良に以れば、此の人、修因の時、疑惑して了せず。故に胎生を受く。故に『經』に説きて言く、「佛智・不思議智を了せず、此の諸智に於て、疑惑して信ぜず。然れども猶ほ罪福を信じ、善本を修習して其の國に生ぜんと願ず。</p>	<p>第二に正果決定についていうと、『無量壽經』の三輩でも『觀無量壽經』の九品でも、ともにいう。「行者は、命が終わる時に臨んで仏の來迎を見る。あるいは蓮華を見、あるいは夢の中で仏を見、あるいは見ない者もある。すぐに七宝の池の中の蓮華の上に自然に身を授かる。その中でも、「功德の」勝れた衆生は「蓮華の上に」生まれれば即座に花が開き、劣った衆生は花が開かない。この「劣った」衆生は、五百年、あるいは十二劫の時を経て蓮華が開き、蓮の胎内で、もろもろの快樂を受けることは、忉利天のようである。しかし仏の姿を見ず、「仏の」教えも聞くことがない。故に、極樂においては胎生と呼ぶのである」と。へ「胎生については」『無量壽經』に説かれていた通りである。よくよく考えると、この衆生は修行するとき疑惑を抱き、「仏の智慧を」理解していない。ゆえに胎生「という報い」を受けるのである。ゆえに『無量壽經』に説く。「仏智、不思議智を理解せず。この諸智を疑惑して信じない。しかし、それでもなお善惡〔の因果〕</p>
---	---	--

此の諸の衆生、彼の宮殿に生じて壽五百歳、常に佛を見ず^②」と。(二云云)

⑦底「同本異譯也」^⑧「同本異譯」

⑧底「不出家斷欲」^⑨「不出家欲」

⑨底「則」^⑩「爾」^⑪「尔」

⑩底「病壽命終」^⑪「壽命終」

『平等覺經』に云く、〈同本異譯なり。⑦〉「其の中輩とは、〈出家斷欲せず⑧。而れども造寺等の福を修す。〉齋戒清淨に慈心精進にして欲念を斷じ、無量清淨佛國に往生せんと欲して、一日一夜斷絶せざれば、其の人、今世に於てまた臥睡夢の中に於て(十一丁右)無量清淨佛を見る。其の人、壽盡さんと欲する時、無量清淨佛、則⑨ち化して、其の人をして自ら佛及び國土を見せしめたまふ。無量清淨佛國に往生する者は、智慧勇猛なることを得べし。佛の言はく、其の人、施與を奉行すること是の如くなる者、若し其の然して後に中ごろ復た悔し、心中に狐疑して、分檀布施し諸善を作して、後世に其の福を得ることを信ぜず、無量清淨佛國有ることを信ぜず、其の國中に往生することを信ぜず。爾⑩りと雖も、其の人、續念絶えず、暫くは信じ、暫くは信ぜず、意志猶豫して専ら據る所無く、其の善願を續結して本と爲れば、續きて往生を得。

其の人病んで壽命終らんと欲する⑪時、無量(十一丁左)清淨佛、則⑫ち自ら形像を化作して、其の人

を信じ、善行を修めて極樂へ往生することを願う。このもろもろの衆生は、かの「極樂の」宮殿に生まれて五百年の間、常に仏を見ることができない」云々と。

『平等覺經』に言う。〈同本異訳である。〉「その中輩とは、〈出家して欲を斷つことまではしない。しかも寺を造る等の福業を修める。〉八齋戒を守り、慈しみの心をもつて精進し、欲念を斷ち、極樂淨土へ往生したいと望んで、一日一夜「その思いの」絶えることが無かつたならば、その人は現世においてまた夢の中で阿弥陀仏を見る。その人が命尽きようとする時、阿弥陀仏は化身をつくり、自然とその人に仏身やその國土をお見せになる。極樂へ往生する衆生は、智慧がすぐれたものとなるであろう。釈尊が説かれる。その衆生が、このように施しを實踐しても、かりにその後、「布施行の」途中でまた後悔し、心の中に疑いを抱き、布施して諸善を作れば、来世でその果報が得られると信じないという。極樂淨土の存在を信じず、その國に往生することを信じないという。以上の通りではあるが、その人は、絶えず「阿弥陀仏を」念じ、暫くは信じ、暫くは信じなかつたりして、その心にためらいがあり、定まる所がなくても、その立派な願いを立て続けて「それを」根本に据えればやがて往生を得る。

その衆生が病んで壽命が終わろうとするとき、阿弥陀仏は、自ら化仏をお作りになって、その衆生に目の当たりにそれをお見せに

欲終」

⑫底「則」〔寛〕

「即」

⑬底「即」〔大〕

「則」

⑭底「則」〔寛〕

「即」

⑮底「即」〔大〕

「欠く」

⑯底「華」〔大〕

「花」

⑰底「則」〔寛〕

「即」

⑱底「是間」〔寛〕

「淨」「是國」

⑲底「自然内」

〔寛〕「自然」

⑳底「百味」〔寛〕

「五百味」

㉑底「喜耳本宿」

〔寛〕「喜羅」○本

宿」〔淨〕「喜耳乃

をして目りに自ら之を見せしめたまふ。口に復た言ふこと能はず。便ち心中に歡喜し踊躍して、意に念言すらく、我れ益濟作善を知らざることを悔ゆ。今まさに無量清淨佛國に生ずべしと。其の人即⑬ち心中に悔過す。其の人、壽命終盡して則⑭ち無量清淨佛國に生ずれども、前んで無量清淨佛の所とに至ることを得ること能はず。便ち道に無量清淨佛國界の邊にして、自然に七寶の城あるを見て、心中に便ち大いに歡喜し、道にして其の城中に止まり、即⑮ち七寶水池の蓮華⑯の中に於て化生して則⑰ち身を受く。自然に長大して城中に在り。是の間⑱に於て五百歳なり。其の城（十二丁右）廣縱各二千里。城中にまた七寶の舍宅有り。舍宅の中に自然に内に⑲皆七寶の浴池有り。浴池の中にまた自然の花有り。浴池の上りに繞りてまた七寶の樹有りて重行せり。⑥皆復た五の音聲を作す。其の飲食せんとする時、前にまた自然の食有り。百味⑳を具す。食、得んと欲する所に在り。其の人、城中に於て快樂す。其の城中、比するに、第二忉利天上の自然の物の如し。

其の人、城中に於て出づることを得ること能はず。復た無量清淨佛を見ることを得ること能はず。但だ其の光明を見て、心中に自ら悔責して、踊躍して喜

なる。「するとその衆生は」言葉を失つてしまふ。すなわち心中で歡喜し舞い踊り、心のなかで申すことには、《私は「人々を」利益し、善根を積むことを知らなかったことを悔いている。今、まさに極樂浄土へ生まれ変わりたい》と。その衆生はすなわち心の中で悔い改める。その衆生は、命が尽きて極樂浄土に往生するが、進み寄つて阿弥陀仏のもとに至ることはできない。その途中で、極樂世界の周辺において、自然にできた七宝の城があるのを見て、心の中で大いに喜び、道中でその城郭の中にとどまり、七宝の池の中に化生して身を授かる。自然に長大となつて城郭の中にいる。この期間は五百年である。その城の横幅と長さは各々二千里である。城の中にはまた七宝でできた建物がある。その建物の中に自然にすべて七宝の池がある。池の中にまた自然の花がある。水浴のできる池のほとりをめぐつて、七宝の樹が整然と立ち並んでいる。それらはまたすべて五種の音を發する。その衆生が飲食しようとする時、目前にまた自然に食物が現れる。それは様々な味をそなえている。食物は得ようと思つたところに現れる。その人は、その城郭の中で楽しむ。例えるなら第二忉利天上の自然にできる物のようである。

その衆生は城郭の中にあつて、そこから出ることはできない。さらに阿弥陀仏の姿を見ることもできない。ただ「阿弥陀仏」の光明を見て、心の中で自ら「の行い」を悔いながらも、舞い踊つて

至其人本宿」

②②底「去耳」〔寛〕

「去羅」

②③底「往至」〔寛〕

大「往生」

②④底「諸」〔寛〕

「欠く」

②⑤底「甚太」〔寛〕

大浄「甚大」

②⑥底「歡喜」〔淨〕

「歡樂」

②⑦底「知」〔寛〕

「如」

②⑧底「則」〔寛〕〔淨〕

「即」

ぶのみ。②①本と宿命に道を求めし時、心口各異に、言念（十二丁左）誠無く、佛經を狐疑して、復たこれを信向せず、まさに自然に惡道の中に入るべきに、無量清淨佛、哀愍威神をもつてこれを引き去るのみ②②。其の人、城中に於て五百歳にして乃ち出づることを得、無量清淨佛の所とに往至②③して、經を聞けども心開解せず。また諸②④菩薩・阿羅漢・比丘僧の中に在ることを得ず。經を聽きて、以て所居の處に去る。舍宅、地に在るをもつて、舍宅をして意に隨ひて高大に虚空の中に在らしむること能はず。復た無量清淨佛を去ること甚太②⑤だ遠くして、無量清淨佛に近附することを得ること能はず。

其の人、智慧明らかならず、經を知ること復た少し。心歡喜②⑥せず、意開解せず。其の人、久（十三丁右）久にしてまた自らまさに智慧開解して、經を知②⑦ること明らかなるべし。健勇猛にして、心まさに歡樂すべし。次いでまさに復た上の第一輩の如くなるべし。〔云云。中輩是の如し。下輩もほぼこれに同じ。第一輩とは、是れ上輩の人なり。まさに經文を見るべし。〕『過度人道經』これに同じ。〔同本〕

元曉の云く、「邊地に生ずる者は、則②⑧ち是れ一類。九品の攝に非ず」⁹⁾と。又、一師の云く、「邊地

喜ぶのみであると。昔、前世に覺りを求めていたとき、心と口とが各々異なり、言葉と思いに誠がなく、仏の説く經を疑い、さらにこれを信仰しない。当然惡道の中に入るべきであるのに、阿弥陀仏が哀れみによつてその者を救いとするのである。その衆生は、城郭の中において五百年経つた後に、そこから出ることができないが、阿弥陀仏のみもとに至つて經を聞いても心は「それを」理解しない。また諸菩薩・阿羅漢・比丘僧の中に入ることもできない。經を聞いて、もと居た場所經を聞いて、もとの居場所へ去るだけである。住まいが地上にあるので、住まいを、思うがままに高く大きくして空中に置くことができない。また阿弥陀仏からはなはだ遠く離れており、阿弥陀仏に近づくこともできない。

その衆生は、智慧が明敏ではなく、經を理解することもまた僅かである。心は喜ばず、意は理解しない。その衆生は、はるか長い時を経て、また自ら智慧を開発し、經を明らかに知ることになるだろう。また勇猛で、心は喜びに満ちるだろう。先に述べた第一輩のごとくであるがそれに次ぐ。〔云々と。〕中輩はこの通りである。下輩もほぼこれと同じである。第一輩とは、上輩の人である。經文を見よ。〕『過度人道經』もこれと同じである。〔同本〕

元曉がいう。「辺地に生まれる者は、すなわち一つの部類である。九品には含まれない」と。また、ある師がいう。「辺地とは、

②⑨底「故」〔寛〕
「故云」

は即ち是れ中品・下品なり」と。今は後の義を存す。
『清浄覺經』に中下兩輩を説くに、此の邊地有るが故に②⑨。

③⑩底「故」〔寛〕
「欠く」

故③⑩に『十住論の偈』に云く、「若し人善根を種うるに、疑へば、即ち花開かず。信心清浄なれば花開きて即ち佛を見る。」⑩

③①底「已上言不合」〔寛〕
「已上不合」

③②底「言」〔寛〕
「云」

③③底「對」〔寛〕
「寸」

③④底「對」〔寛〕
「寸」

「寸」

又一切經の中、『彌陀佛の偈』に云く、「疑有れば胎中に在りて合はざること五百（十三丁左）年。疑はざれば臺座に生じて無量の前に叉手す」と。〔已上。〕

「不合」と言ふは③①多本同じく爾なり。今案ずるに聖衆に會はざる故に「不合」と言③②ふ。まさに不疑の者、佛前に叉手すと云ふに對③③すべし。二文相對③④するに即ち花を以て胎と爲す。故に知んぬ。胎宮とは即ち中下輩なり。

問ふ。『大無量壽經』に胎生を説くに、「宮殿の中に在り」⑩と。今何ぞ花を以て胎生とするや。

答ふ。『無量壽會』の文に云く、「彼等の衆生、花胎の中に處して、猶ほ苑園・宮殿の想の如くす」⑩と。〔云云〕

中品・下品である」と。今私珍海は、後者の説をとる。『清浄覺經』に中・下兩輩を説くのに、この辺地があるからである。

ゆえに『十住毘婆沙論』の偈にいう。「もし人が善根を植えても、疑うと花は開かず、信心が清浄であると花が開いて仏の姿を見ることができ」と。

また一切經の中の、『後出阿弥陀仏偈』にいう。「疑心があると胎中に生まれて、〔仏と〕五百年合わない。しかし、疑わないと蓮台の上に生まれて阿弥陀仏の前で合掌する」と。〔以上。〕「合わない」という読みは、〔他の〕多くの異本でも同様である。今、思案すると、聖衆に會うことがないので「合わない」というのであろう。「疑わないものは、仏の前で合掌する」というのと対照させるべきである。〔『十住毘婆沙論』と『後出阿弥陀仏偈』の〕二つの文を対比すると、花を胎としている。故に胎宮とは中・下輩のことであると理解できる。

【問】問う。『大無量壽經』に胎生を説いて、「宮殿の中に在り」といふ。どうしていま花〔の中にあることを〕をもって胎生とするのか。

【答】答える。『無量壽會』の文にいう。「かの衆生たちは花胎の中にいて、まるでそこが花園や宮殿であるかのように想う」云々と。

③⑤底「爾」寛

「尔」

③⑥底「耶」寛⑥

③⑦底「乎」

③⑦底「九品同

異」⑥「九品本

同異」

③⑧底「互」寛

「牙」

③⑨底「違」寛

「遠」

問ふ。時に差別有り。胎生は五百歳を経、九品の中は或は六劫^⑬十二劫^⑮或は七日七七^⑰日と。既に爾^{③⑤}なり。如何ぞ相ひ攝することを得んや^{③⑥}。

答ふ。『大經』の三輩、『觀經』の九品、同異^{③⑦}稍多し。(十四丁右)然れども相攝することを許す。胎宮の一事、奇とするに足らず。夫れ往生の類、差降無量なり。文の中に互^{③⑧}に擧げ、出沒異を爲す。言、同じからずと雖も、義、實に違^{③⑨}はず。今此の經に依るに、疑惑中悔のものはまさに地獄に入るべきに、佛の威力に由りて強いて往生を得しむ。淨土に生ると雖も、薄福小智にして佛に近づくこと能はず。經法を識らず。此の如きの果報、何ぞ及ばざらんや。

問ふ。若し疑心の者、また往生を得ば、何が故ぞ三種決定の中に唯だ信心を取りて決定とするや。

答ふ。信は是れ決定の義なり。故に信に約して決定を明す。まさに知るべし。此の人、疑悔を生ずと

【問】問う。時間に区別がある。胎生は五百歳を経、九品の中はあるいは六劫、十二劫、あるいは七日、七七日を経ると。現にこの通りである。どうして互いに含むことができようか。

【答】答える。『無量寿經』の三輩と、『觀無量寿經』の九品は、同異がやや多い。しかしながら相含んでいると認められている。胎宮の一事についても、異とするに足りない。そもそも往生の類別は上下の位の違いが計り知れない。文言の中に「三輩九品を」たがいに挙げ、文言にも出入りがあつて異なっている。「このように」言葉は同じではないが、意味内容は真実と矛盾していない。今この經(『平等覺經』)に依ると、疑惑して途中で後悔する者は地獄に入るべきではあるが、「阿弥陀」仏はその威力によって、あえて往生を得させる。「その衆生は」淨土に往生しはするが、福德は薄く智慧は乏しいので阿弥陀仏に近づくことができず、教えを理解することもできない。これらの果報がどうして「中品下品に」及ばないといえようか。

【問】問う。もし疑心の者もまた往生を得るのであれば、どうして三種の決定の中に信心だけを取り上げて決定とするのか。

【答】答える。信とは決定の意味である。故に信について決定を明らかにしたのである。まさにこの衆生は、疑いの心を起こし

雖も、暫信の時に於て定業已に成ず。(十四丁左) 故に經に説きて「暫信、暫不信」と言ふ。まことにいれば此の人、得有り。失有り。信に由るが故に往生す。疑に由るが故に胎に在り。

- 問ふ。『菩薩處胎經』に云く、「西方、此の閻浮提を去ること十二億那由他にして懈慢界有り。國土^{④〇}快樂にして、倡伎樂を作す。衣被服飾、香花莊嚴、七寶轉た牀^{④①}を開く。目を舉げて東に視れば、寶牀^{④②}隨轉し、北に視、西に視、南に視ることもまた^{④③}是の如く轉ず。(私に云く、自^{④④}ら座する所^{④⑤}の牀^{④⑥}、廻願に隨ひて轉ずるなり。意は、其の中の衆生、諸の妙境^{④⑦}に於て、久久^{④⑧}に受用して勞倦無きことを顯示せんと欲するなり。前後發意の衆生、阿彌陀佛國に生ぜんと欲する者^{④⑨}、皆深く懈慢國土に著して前進して阿彌(十五丁右)陀佛國に生ずること能はず。億千萬衆、時に一人有りて、能く阿彌陀佛國に生ず。何を以ての故に皆懈慢にして執心牢固ならざるに由りてなり。^{④⑩}」(云云)此の經の説に準^{⑤〇}ずるに、往生を願する者千万^{⑤①}衆の中に、乃ち一人有りて生ずることを得。餘は則^{⑤②}ち生ずること能はず。若し爾^{⑤③}らば、何ぞ決定往生と言ふことを得るや^{⑤④}。
- ④〇底「土」寛
「欠く」
④①底「牀」寛大
「床」
④②底「牀」寛大
「床」
④③「南視亦」寛
「南亦」
④④底「自」寛
「白」大「目」
④⑤底「所」寛淨
「處」
④⑥底「牀」寛大
「床」
④⑦底「久久」寛
「見之」
④⑧底「者」寛淨

ても、暫信の時間において定業が完成していると知るべきである。故に經に説いて「暫信・暫不信」という。深く考えてみると、この衆生には、利得もあれば、損失もある。信によるから往生し、疑によるから「花の」胎内にあるのである。

【問】問う。『菩薩處胎經』にいう。「西方へ、この閻浮提から十二億那由他の仏國土を過ぎたところに懈慢界がある。「その」國土は心地よく、音楽を奏でている。衣服や装飾、香花といったきらびやかなしつらが七宝できており、それらが床に果てしなく敷き延べられている。目を舉げて東を見れば、宝の床は果てしなく続き、北を見、西を見、南を見ても同様に続いている。(私見を述べる。衆生が座る床が、その願いに応じて出現するのである。「その」意図は、その中の衆生が、諸々の勝れた感官の対象を、久しく享受して、飽くことが無いのを示そうとするのである。前後相次いで発心した衆生で阿彌陀仏國に往生しようとする者も、皆深く懈慢國に執着し、その先に進んで阿彌陀仏の國土に生まれることができない。億千万の人々の中にまれに一人、阿彌陀仏國に往生することができるだけである。それはなにゆえかからである。」云々と。この經の説に従うと、往生を願う者の幾千万人の中に、わずか一人だけが往生でき、その他は往生することができない。もしそうならどうして決定往生ということができようか。

「欠く」

④9 【補註1】参
照。

⑤0 底「準」〔寛大〕

浄「准」

⑤1 底「万」〔大浄〕

「萬」

⑤2 底「則」〔寛浄〕

「即」

⑤3 底「爾」〔寛〕

「尔」

⑤4 底「耶」〔寛大〕

浄「乎」

⑤5 底「後時」〔寛〕

浄「彼時」

⑤6 底「攝」〔大〕

「接」

⑤7 底「只」〔大〕

「亦」

答ふ。先來多く云ふ。「若し懈慢に生ずれば、後時⑤⑤、決定して轉じて極樂に生ず」と。故に彼の經の次の文に云く、「斯れ等の衆生、自ら殺生せず。また他を教へて殺さしめず。此の福有るをもつて、報じて無量壽國に生ず。」〔已上〕禪林の云く、「邊地を極樂に設けることは疑惑の輩を引かんが爲なり。化城を懈慢に假ることは、雜修の（十五丁左）者を攝⑤⑥するを以てなり。易往の土に於て心に怯弱せざれ。只⑤⑦決定往生の想を作すべし」と。此れ法花の

【答】答える。昔より多くいわれている。「もし懈慢〔国〕に往生すれば、後に確實に轉じて極樂に往生する」と。故にかの經『菩薩処胎經』の次の文にいう。「これらの衆生は自ら殺生せず。また他をそそのかして殺生をさせることもない。この福德があることにより、報われて無量寿国に生まれる」と。禪林寺永観がいう。「辺地を極樂に設けたことは、疑惑の者も往生させるためである。化城を懈慢に例えたことは、雜修の者も救うためである。往生が容易である浄土に対して心を弱くしてはならない。ただ決定往生の想を抱くべきである」云々と。これは、『法華經』の

化城喩の義を借りて、以て極樂中途の懈怠を解す。⁽²³⁾
意、第三生を取りて、以て決定を明す。

⑤8底「懷感禪師」大「懷感師」
⑤9底「準」寛大
⑥0底「懈慢」寛
大淨「懈慢國」
⑥1底「万」大淨
「萬」
⑥2底「多」寛淨
「只」
又懷感禪師⑤8、導和尚に依りて云く、「執心牢固の者は、定んで極樂に生ず⁽²⁴⁾」と。又云く、「專修の人は、千に一も失すること無し⁽²⁵⁾」と。〈云云〉此の文の意に準⑤9するに、懈怠⑥0の人、未だ極樂に生ぜず。

問ふ。凡夫の行者、專修得難し。故に千万⑥1衆の中に乃ち一人生ずること有り。故に今世の人、多くは⑥2是れ失せんか。

答ふ。若し次生に約せば、失にして得に非ず。第三生に約すれば得にして失に非ず。また、『雙卷の記』に胎生の者を判じて（十六丁右）以て其の失とす。而れども彼れ既に生ず。失と言ふ⑥3べからず。且く九品に約して得失を論ずるのみ。總じて⑥4得失を論ぜば各三種の類⑥5有⁽²⁷⁾。得の中の三とは、即ち三輩なり。失の中の三とは、『平等覺經』等に説く

化城喩の意図を借りて、極樂までの途中にある懈怠を解釈しているのである。意図としては第三の生涯について「往生が」確定的であると明らかにしているのである。

また懷感禪師は、善導和尚に依つていう。「執心の堅固な者は、必ず極樂に往生する」と。またいう。「專修の人は、千人のうち一人も往生しないものはない」云々と。これらの文の意味に随うと、懈怠の人は未だ極樂に往生していない。

【問】問う。凡夫の行者は、專修を得難い。ゆえに何千万という多くの人々のうち「わずか」一人が往生できるだけである。ゆえに今の世（末法）の人の多くは往生できないの（失）ではなからうか。

【答】答える。もし次の生涯についていうならば、失であり、得ではない。第三生（次の次の生涯）についていうならば、得であり失ではない。また、『慧遠の』『無量壽經義疏』には胎生の者を判定して失とする。しかしその人は、現に極樂に往生しているから失というべきでない。ひとまず九品について得失を論じているだけである。全体として得失を論じれば、各々三種類ずつある。得の中の三というのは三輩である。失の中の三というのは、『平

⑥5底「三種類」
⑥大淨「三類」

が如し。聞きて謗を生ずるを以て上の失とす。地獄に墮するが故に。懈怠國に生ずるを中品の失とす。疑心胎生を下品の失とす。〈第三の疑心胎生は得失の二門に通ず。〉

⑥6底「既引」⑥大

「既即引」
⑥7底「胎生宮」
⑥大淨「胎宮」
⑥8底「万」⑥大淨

今案ずるに此の義、先意に同じからず。まさに知るべし。言ふ所の懈怠國とは、即ち是れ極樂の邊地なり。言ふ所の「執心不牢固」とは、即ち是れ、暫信、暫不信の義なり。胎生の人の疑惑中悔は、即ち懈怠の過なり。また（十六丁左）疑惑の人は應に惡道に入るべし。佛、既に⑥6これを引きて、懈怠の輩を將に極樂に生ぜしめんとす。佛何ぞこれを捨てんや。故に知んぬ。懈怠は即ち是れ胎生宮⑥7なることを。故に順次生を決定とするなり。

⑥9底「經經」⑥大淨

問ふ。極樂は此を去ること十万⑥8億刹、懈怠は即ち十二億那由他を過ぐと。此を去る道數同じからざることは何ぞや。

⑦0底「云」⑦大淨

答ふ。直ちに極樂此を去る遠近に於て、經經⑥9乃ち異なり。「過十萬億佛土」³¹と云ひ、又「百千俱胝那庾多國」と云ひ⑦0、又、「千億⑦1國」と云ふが如し。豈に道數に異説有るを以ての故に、便ち別土と

等覺經』等に説かれている通りである。①²⁸「教えを」聞いて誹謗することを上級の失とする。地獄に墮ちるからである。②懈怠國に生まれることを中級の失とする。③疑心胎生を下級の失とする。〈第三の疑心胎生は得と失の両方にあてはまる。〉

今思案するに、この解釈は先（辺地と懈怠を別と理解してきた先人）の趣旨とは異なっている。ここで言うところの「懈怠國」とは極樂の中の辺地であると理解すべきである。「執心不牢固」²⁹とは即ち「暫信・暫不信」の意味である。胎生の人の「疑惑中悔」というのは、怠惰の過失である。また疑惑の人は惡道に入るべきである。仏は現にこれら懈怠の輩を引いて極樂に往生させようとする。仏はどうしてこれらの人々を見捨てることがあるのか。ゆえに懈怠は胎生であることがわかる。であるから第二の生涯を決定とする。

【問】問う。極樂はここから十万億の仏国土を過ぎた先にある。懈怠國はすなわち十二億那由他の（仏国土）を過ぎた先である。ここ（娑婆世界）からの道のりの数字が同じでないのはどうしてか。

【答】答える。真つ直ぐここ（娑婆）から極樂に至るまでの距離は經典によつて異なっている。たとえば「十万億の仏国土を過ぎる」といい、また「百千俱胝那由他国土」といい、「千億万の国土」といつている通りである。どうして道のりの数字に異説が

⑦①底「萬」〔寛〕

爲さんや⑦②。

「万」

⑦②底「哉」〔寛〕〔浄〕

「乎」

⑦③底「万」〔大〕〔浄〕

「萬」

⑦④底「往極樂中

途」〔大〕「極樂之

中途

⑦⑤底「哉」〔寛〕〔浄〕

「乎」

⑦⑥底「万」〔大〕〔浄〕

「萬」

⑦⑦底「是」〔寛〕〔浄〕

「嚴」

⑦⑧底「是」〔寛〕〔大〕

〔浄〕「欠く」

⑦⑨底「閻浮地」

〔大〕「閻浮刹地」

今懈怠界は既に別經に出でたり。傳者同じからず、小事に勞せざれ。若し（十七丁右）語言に依れば、懈怠は便ち遠し。十俱胝を以て那由他とす。即ち「十二億那由他」とは、十万⑦③億に望むるに其の數乃ち多し。何ぞ「極樂の中途に往く⑦④」と言ふべき者ならんや⑦⑤。此の義を明かさんと欲せば、先づ須くまさに「十万⑦⑥億」と言ふは、一四天下を以て一國と爲してこれを數ふと云ふことを知るべし。

故に『平等覺經』に云く、「西方は是れ⑦⑦是⑦⑧の閻浮地⑦⑨の界を去ること千億万⑧⑩の須彌山佛國なり」③②と。『過度人道經』これに同じ。閻浮提を以て須彌山に對す。故に知んぬ。但だ四天下に約すといふことを。

あるからといって、別の国土とできようか。

いま懈怠界は現に別の經典に出ている。伝える者は同じでない。小さなことにとらわれてはならない。もし文言に依れば、懈怠は遠い。十億を那由他とする。すなわち「十二億那由他」というのは、十万億と對比してその數が多い。どうして「極樂への途中に往く」といふべきところであろうか。この道理を明らかにしたいと思うのであれば、まず「十万億」というのは、「一つの四大洲（須彌山世界）を一国として、これを數えている」と知るべきである。

ゆえに『平等覺經』にいう。「西方極樂淨土は、この閻浮提のある世界から千万億の須彌山仏國を超えた先にある」と。『過度人道經』もこれと同様である。閻浮提を須彌山と對比させている。ゆえに、ただ四大洲（須彌山世界）に関して述べているということが理解できる。」

⑧〇底「万」大淨
「萬」

⑧1底「言」大

「云」

⑧2底「万」大淨

「萬」

⑧3底「位」大

「億」

⑧4底「万」大淨

「萬」

⑧5底「二」大

「二者」

⑧6底「四万万」

大「四者萬萬」

淨「萬萬」

⑧7底「万」大淨

「萬」

⑧8底「總數」大

淨「惣數」

⑧9底「爾」大

「尔」

又懈慢國を説くに、「閻浮提を去ること十二億那由他」と云ひて、娑婆を去ると言は⑧1ず。故に知んぬ。また四（十七丁左）天下國に據ると云ふことを。又十萬億と百千俱胝と言に異有ることは、十萬⑧2は百千に當たる。億とは俱胝に當たる。

人師の云く、「西方の數法、億に多位⑧3有り。一には十萬⑧4を億と爲し〈落叉〉、二には⑧5百萬を億と爲し〈度落叉〉、三には千萬を億と爲し〈俱胝〉、四には万万⑧6を億と爲す。〈那由他〉。故に百千俱胝を以てまた十萬⑧7億と名づく。百千俱胝那由他と言ふは、此の那由他は只是れ總數⑧8にして別數に非ず。又十二億那由他と言ふは、まさに十萬億に過ぐるなるべし」と。此の中の意の云く、極樂界に入りて此の邊地に在るを、別に其の地を指す。故に爾⑧9（十八丁右）云ふなり。

また懈慢國を説くのに、「閻浮提から離れること十二億那由他」といつて、「娑婆を去ること〔云々〕」とは言わない。ゆえにまた四大洲を一国とする考えに拠ることが理解できる。また、十萬億と百千俱胝という言葉に違いが有ることについては、十萬は百千に相当する。億というのは俱胝に当たる。

先学がいう。「インドで数を数える方法として、億には多くの位がある。一つには十萬を億とし、〈落叉〉、二つには百萬を億とし〈度落叉〉、三つには千萬を億とし〈俱胝〉、四つには万万を億とする。〈那由他〉ゆえに百千俱胝を十萬億と名付けるのである。百千俱胝那由他というが、この那由他は、ただこれは総体的な数であつて個別の数ではない。また、十二億那由他とは、まさに十萬億に勝っているべきである」と。この中で意図していることをいえば、極樂世界に入つてその辺地にあるのを、個別にその地として指示している。ゆえにこのそのようにいうのである。

⑨〇底「生」〔寛浄〕

「衆生生」

⑨1底「耶」〔寛浄〕

「乎」

⑨2「如大乘玄云

蓮華中退大心出

生之後取小果

也」〔寛浄〕「欠

く」

⑨3底「此」〔寛大

浄〕「是」

⑨4底「也」〔大

「耳」

⑨5底「耶」〔寛浄〕

問ふ。懈怠を説きて「修不殺業」と云ふ。「此の福報有るをもて無量壽國に生ず」^{⑨4}と⑨〇。〈云云〉豈に生じ已りて復た更に生ずることを得んや⑨1。

答ふ。胎より出づるを説きて、名づけて生と爲す。『大乘玄』に云ふが如き、「蓮華の中に大心を退して、出生の後、小果を取る」^{⑨5}と⑨2。

又一義に云く、「不殺を修すとは、娑婆に在る時の慈心不殺なり。無量壽國に生ずと言ふは、即ち懈怠界なり。是れ無量壽佛の國土なればなり。或は即ち此の⑨3國の人民、壽無量なるが故に無量壽國と名づく。即ち不殺の因を擧げて、長壽の果を顯す。」と⑨4。

問ふ。若し懈怠に生じて、即いて已に阿彌陀國に生ぜば、何が故ぞ經に（十八丁左）「進みて阿彌陀國に生ずること能はず」と言ふや⑨5。

【問】問う。懈怠を説いて「修不殺業」という。「この福報があることによって極樂に往生する」云々と。どうして〔極樂（迦地）に生まれた〔後に〕またさらに生まれることができるか。

【答】答える。胎から出ることを説いて、名付けて「生」とする。『大乘玄論』に言っている通りである。「蓮華の中で大菩提心から退いて、出生した後小乗の覺りをとる」と。

また、一説にいう。「不殺を修めるといふのは、娑婆世界にあるときの慈心不殺のことである。無量壽國に生まれるといふのは、すなわち懈怠界にある。これは無量壽佛の國土だからこそである。あるいは、すなわちこの國の人々は壽命が計り知れないので無量壽國と名付ける。すなわち不殺生という原因を擧げて、長壽という果報をあらわす。」と。

【問】問う。もし懈怠に生まれると、そのときすでに阿彌陀佛國に往生していることになるのであれば、どうして經に「さらに進んで阿彌陀國に往生することはできない」というのか。

「乎」

⑨⑥底「前」
〔寛浄〕

「進」

⑨⑦底「更」
〔寛浄〕

「欠く」

答ふ。邊地に稽留して佛所に近からず。故に「進みて佛國に生ぜず」と云ふのみ。胎宮を説きて「前みて⑨⑥無量清淨佛所に至ること能はず」と云ふが如し。まさに知るべし。彼の國に多くの界地有り。印度國の中に更に⑨⑦多國有るに、或は一城を以て國と名づくる等の如し。衆寶國土の一一の界、別にして、或は黄金を地と爲し、白銀を地と爲し、或は復た二寶多寶、轉た共に合成せり。

⑨⑧底「爾」
〔寛〕

「尔」

⑨⑨底「者」
〔寛浄〕

「欠く」

導和尚の云く、「無量の寶幢有りて、各の一一の界を擎ぐ」と。〔云云〕若し娑婆に擬せば、百億四天下等の如く、彼の國もまた爾⑨⑧なり。但し彼こには金繩等を以てこれを界ふ。別に輪圍山無し。〔十九丁右〕此の義に由るが故に、彼の國に生ずと雖も、また説きて「不生」と言ふことを得る者⑨⑨なり。③⑥

問ふ。感師の云く、「佛の來迎無き者、懈慢界に墮す」^{③⑦}と。〔云云〕而るに胎生の人には佛の來迎有り。故に知んぬ。是れ別なることを。何が故ぞ一と爲すことを得んや。

答ふ。『平等覺經』に胎生を説きて云く、「佛また

【答】答える。辺地にとどまつて、仏のおられる所には近づくかない。ゆえに「すすんで仏の國に生まれない」といつているだけである。胎宮を説いて、「さらに進んで阿弥陀仏のもとに至ることはできない」というのと同様である。彼の國に多くの領域があると知るべきである。印度國の中にさらに多くの國があるが、あるいは都城一つを國と名付ける等のごとくである。多くの寶でできた國土は、一つ一つ領域が別であつて、あるいは黄金を大地とし、白銀を大地とし、あるいはまた、二種の寶・三種以上の寶から成つてゐる。

善導和尚はいう。「数限りない寶幢があつて、各々一つ一つの領域を支えている」云々と。もし、娑婆になぞらえれば、百億の四大洲等のようで、彼の國もまたその通りである。ただし、ここでは、金の繩等によつてこれを囲む。別に須弥山の周圍を囲む山も無い。この解釈に依るから淨土へ往生してはいるが、また説いて「往生していない（不生）」ということができるのである。

【問】問う。懷感禪師がいう。「仏の來迎が無い者は、懈慢界に墮ちる」云々と。しかし胎生の人には仏の來迎がある。ゆえに〔懈慢界と胎生〕は別であると理解できる。どうして〔兩者を〕一つとすることができようか。

【答】答える。『平等覺經』に胎生を説いていう。「仏はまた、

爾¹⁰⁰底「爾」^寛
「尔」
¹⁰¹底「準」^{寛大}
「準」
¹⁰²底「則」^{寛淨}
「即」

爾¹⁰⁰の身の諸の所作をして、自然にこれを得せ使むるにはあらず。皆心に自ら趣向す。道にして其の城中に入る³⁸」と。〈云云〉此の説文に準¹⁰¹ずるに、胎生と懈怠と則¹⁰²ち別無し。〈此の界を去る時は、實には佛の引に由る。邊地に到る時に佛即ち放捨す。佛國に至るを以ての故なり。〉

又導和尚、『觀經の疏』に云く、〈第三卷、地想觀の中の「心無疑」¹⁰³を釋するの文なり。〉「修因正念にして、疑〔ひ〕を雜ふることを得ざれ。往生を得と雖も、花に含みて未だ出でず。或いは（十九丁左）邊界に生れ、或いは宮胎¹⁰⁴に墮す。或いは大悲菩薩の、開花三昧に入るに因りて、疑障乃ち除こり、宮¹⁰⁵花開發して身相顯然たり。法侶攜へ將きて佛會に遊ばしむ³⁹。〈云云〉今此の文を見るに、胎宮と懈怠と因果雙べ擧ぐ。謂く、雜修の者をば名づけて懈怠と爲す。『禮讚』に云く、「雜修不至心なるは千中に一も無し⁴⁰」と。疑は即ち胎生の因なり。故に知んぬ。今「雜疑」と言ふは二説を竝べ擧ぐ。是れ二説なりと雖も、潛合して一と爲す。「含花未出」とは、總じて¹⁰⁶果失¹⁰⁷を擧ぐ。「或生邊界」とは即ち懈怠なり。「或墮宮胎」とは是れ疑心の人なり。此れまた二説を雙べ擧ぐ。而れども義は潛じて一¹⁰⁸

あなた自身の行いによって自然にこの「果報」を得させるのではない。皆心に思つて自ら趣く。途中でその城の中に入る」云々と。ここに説かれる文言に従うと、胎生と懈怠に区別はない。〈この「娑婆世界」を去る時は、実は仏の引接に依る。辺地に至った時に仏は「衆生を」解き放つ。仏の國に至ったからである。〉

また善導和尚が『觀經疏』にいう。〈第三卷（定善義）地想觀の中の「心無疑」¹⁰⁴を解釈する文である。〉「往生の因を修めるのに正念を保ち、疑いをまじえてはいけない。〔もし疑いをまじえれば〕淨土に往生しても花の中に居て、外へ出られない。あるいは邊界に生まれ、あるいは宮胎に落ちる。あるいは大悲觀音菩薩が開花三昧に入られることによって、疑いという障害が取り除かれ、花が開き、身体に三十二相がはつきりと現れる。聖衆が手をたずさえ導いて、仏の説法の會座に連ならせる」云々と。今この文を見ると、胎宮と懈怠との因果を並べて取り上げている。つまり、雜修の者を名づけて懈怠とする。『禮讚』にいう。「雜多な修行に手を出して心がこもらない者は、千人の中に一人も往生しない」と。疑とすなわち胎生の原因である。故に、いま「雜疑」というのは、二つの説（雜修と疑心）を並べて挙げており、また二つの説であつても、合わせて一つとして理解できる。「含花未出」とは、まとめて「極樂往生の」果報の短所を挙げる。「或生邊界」とは、すなはち懈怠の人である。「或墮宮胎」と

なり。「雖得往生」と言ふは、即ち懈怠、(廿丁右)既に極樂に生ずることを顯す。若し爾らば、先賢既に自ら懈怠の徳失^⑩を辨ず。末學更に往生の難易に迷ふことなかれ。

問ふ。經に極樂の衆生の相を説きて云く、「皆自

然虚無の身、無極の體^⑩を受く。咸く同じく一類にして人に非ず、天に非ず、形、相好を具して、佛の如くにして異なること無く、身、神通を帶して、自在無礙^⑪なり^⑫」と。今の凡夫の如きは、久しく相好の業を修せず。何に由りてか忽ちに諸相を備へん。又四禪定を修習せず。何ぞ能く速かに神通を得ん。又彼の衆生は壽、虚空に等し。自ら別願に非ざれば中天有ること無し。今の衆生の如きは淨戒を修せず、生命を護らず。何ぞ忽ちに其の報を感^⑬ぜんや^⑭。

「忽何感」^⑮
「耶」^⑯
「乎」^⑰

「欠く」^⑱

答ふ。(廿丁左)迦才の云く、「是れ化生の處にして極妙に非ず^⑲」と。(云云)意の云く^⑳、此の方また化生有り。故に極妙に非ず。是れ化生なるを以て

は疑心の人である。これもまた二つの説を並べて挙げてゐる。そうではあるが、意味は混合して一つである。「雖得往生」というのは、つまり懈怠(の人)が、すでに極樂に往生していることをいいあらわしている。もしそうなら、先賢(善導和尚)は明らかに自ら懈怠の長所・短所を述べている。後学の者は、決して往生の難易に迷うことがあつてはならない。

【問】問う。經に極樂の衆生のありさまを説いていう。「皆、自然で虚無の身、極まりのない体を授かる。ことごとく同一の類で、人でもなく、天でもない。身体には相好を具えて仏のようであつて異なるところは無く、身には神通力を帶び、自在でまたげがない」と。現今の凡夫のごときは、永らく三十二相を備えるための行を修めたわけではない。どうしてたちまちに多くの相を備えられようか。また、四禪定を修したこともない。どうして速やかに神通力を得られようか。^㉑また「極樂の」衆生は、壽命が虚空のように限りがない。自ら個別に立てた誓願^㉒によるのでなければ、途中で死ぬことは無い。現今の衆生は淨らかな戒を修めず、「他者の」命を守ることもない(不殺生戒を保つことがない)。どうしてたちまちにその「長壽」の報いを受けることができようか。

【答】答える。迦才がいう。「この〔極樂は〕衆生が化生する場所であつても極めて勝れたところではない」云々と。意味するところは、以下の通り。この娑婆世界にもまた化生がある。故に

の故に「自然」と云ふ。

又佛を念ずるに由るが故に相好身及び無量壽を具す。諸^{⑪⑤}の天子初生の時始めて見る所の者、便ち身色^{⑪⑥}を成ぜるが如し。行者もまた爾^{⑪⑦}なり。始めて佛法に入りて、淨土の教へを聞きて、佛如來の常我の徳を念じて淨業を起せば、便ち淨土を得、佛の究境の常・樂・我・淨^{⑪⑧}に似たり。まさに知るべし。西方と此土とに其の四榮と四枯^{⑪⑨}と有り。四枯とは是れ無常・苦・無我・不淨なり。四榮とは、即ち是れ常・樂・我・淨^{⑪⑩}なり。

⑪⑤ 底「諸」 寛淨
「說」
⑪⑥ 底「身色」 寛
淨「色身」
⑪⑦ 底「爾」 寛
「尔」
⑪⑧ 底「淨」 寛淨
「常」
⑪⑨ 底「淨」 寛淨
「常」

夫れ娑婆世界は一期の（廿一丁右）壽命、猶ほし電光の如し。彼土の衆生は芥城を日夜と爲し、塵沙を大期と爲す。故に此の土をば無常の境と爲し、彼の國をば常住の處と爲す。

又此の方の中には衆苦充滿して甚だ怖畏すべし。現には則^{⑫①}ち八苦、此の身を逼め、後には則^{⑫②}ち三途、我が報を迎ふ。貴賤簡ぶこと無く、賢愚同然なり。彼の土の衆生は衆苦有ること無く、但だ諸樂を

⑫① 底「則」 寛淨
「即」
⑫② 底「則」 寛淨

「化生であるからといって極樂は」極めて勝れたところではない。ここでは化生であるから「自然」というのである。

また、仏を念じることによって、三十二相八十種好^{⑬④}を具えた身体や量り知れない命^{⑬⑤}を具える。天の子が生まれたばかりのとき、初めて目撃されると、すなわち「すばらしい」身体の姿を具えているようなものである。「仏を念じて極樂へ往生する」行者もまたこの通りである。初めて仏門に入つて、淨土の教えを聞き、仏・如來の常・我の徳を念じて、淨らかな修行を積めば、すなわち極樂淨土へ往生でき、仏の究極の境地である常・樂・我・淨に似た者となる。まさに知るべきである。西方と、此の国土（娑婆世界）とにそれぞれ四榮と四枯とがある。四枯とは、無常・苦・無我・不淨である。四榮とは、すなわち常・樂・我・淨である。

そもそも娑婆世界では、一生涯の壽命は稻妻のように短い。極樂の衆生は芥子粒で都城^{⑭①}を満たすほどの年月を一昼夜とし、「世尊の」細かな砂の数ほどの年月を一生涯とする。故にこの土（娑婆世界）を無常の境涯とし、極樂淨土を常住の所とする。

また、この娑婆世界の中には多くの苦が充滿して、大変恐ろしい。現世では八苦がこの身に迫り、来世では三途が我が身を待ち構える。身分の貴賤を選ぶことなく、賢者も愚鈍な者も同じである。かの極樂の衆生には諸々の苦が無く、諸々の樂のみを「身

「即」
⑫底「亦」〔寛〕

「是」

受く。溫和なるは是れ、春の花鳥、目を悦ばしめ、清涼なるは、また⑫秋の風水、情に適ふ。法音耳に在り、法喜胸に滿つ。彼こは樂、此こは苦。同日にもこれを言はんや。

⑬底「礙」〔寛〕
「碍」

又此土の衆生は、身心累礙⑬して皆自在に非ず。

歩は咫尺の中に勞らひ、心は瞬息の（廿一丁左）外に闇し。衣は女功を盡し、饈は夫力を費す。諸の施爲する所、勞多くして果少なし。彼土の衆生は坐しながら寶臺に乗じて上、虚空に昇り、朝には恒沙の佛刹に飛びて、俄に七寶の樹下に歸り、浴池は塵勞を洗ひて淺深念に隨ひ、香飯は道味を進めて早晚、意に任す。凡そ物を歷、事に觸れて自在ならずといふこと無し。彼の我と此の無我と、思ひてこれを辨ずべし。

⑭底「界」〔寛〕

「淨」

⑮底「則」〔寛〕

「即」

⑯底「坦」〔寛〕

「恒」

⑰底「萬」〔寛〕

又、此の方は則ち人身の三十六物、毘弊比ひ無し。天下百億の界⑭、滓穢充滿す。彼の土の衆生は身色光淨にして、表裏鮮潔なり。外器は則⑮ち瑠璃の庭坦⑯かに、摩尼の水清く、宮殿寶林萬⑰物清淨なり。（廿二丁右）彼の淨と此の穢と對して識らざらんや。既に「淨土」と云ひ、又「極樂」と名づく。樂淨、名に顯⑱はる。何ぞ其の義を尋ねん。壽を「無量」と曰ふ。身是れ自在なり。常我體⑲に備ふ。誰か彼

に」受ける。溫和であるのは春の花や鳥が目を楽しませるようであり、清涼であるのは秋の風や水が心を和ませるようである。説かれた教えは耳に入り、教えによつて起る喜びは胸に滿ち溢れる。淨土は樂、娑婆は苦。どうして同日の論であろうか。

また、娑婆の衆生は、身も心も妨げとなつてまったく自在ではない。少し進むにも苦勞し、心は一瞬先も知ることがない。衣を得るためには女が技を尽くし、食事を得るためには男が力を費やさねばならない。あらゆる行いは勞多くして果報は少ない。かの極樂淨土の衆生は、坐つたまま宝の台座に乗つて虚空へ上昇し、朝には、無數の仏国土に飛んで、にわかに七宝の樹の下に歸る。沐する池は煩惱を洗つて、浅い深いも思い通りである。かくわしい食事は、覺りの味を増進させ早い遅いも意のままである。いかなる対象を取り、事物に觸れても自在でないということはない。淨土の我と娑婆の無我とをよく考えて區別せよ。

また、この娑婆世界は人間の身体の三十六物が不淨であることには比べるべきものがない。〔四大洲〕百億の集まつた境界には、汚物が充滿している。かの極樂淨土の衆生は、身体の色が輝き清らかで、表面も内面も清潔である。環境について言えば、瑠璃の庭は平らで、宝珠の水は清く、宮殿や宝林等のあらゆる物が清淨である。かの極樂淨土の淨と、娑婆の穢を相對させて區別できないはずがあるうか。現に「淨土」といい、また「極樂」と名付ける。安樂さと清淨さとは名称にあらわされている。どうしてこの

「万」

⑫⑧底「顯」〔寛浄〕

「題」

⑫⑨底「體」〔寛〕

「躰」

⑬⑩底「如」〔寛浄〕

「欠く」

⑬⑪底「耶」〔寛浄〕

「乎」

の徳に迷はん。四枯四榮、駄ふべく欣ふべし。淨業此れに因りて、必ず成就することを得。此の淨業に由りて果報また淨なり。此れは是れ佛に近づくが故に佛の四徳に似たり。

然るに復た疑心胎生の人は初生の時、所受の境界、或は第二の忉利天の如く⑬⑩、夜摩天の宮殿に處するが如し。〔夜摩天とは、『無量壽會』⑤⑥の文に見えたり。〕世俗の凡夫、豈に分非ざらんや⑬⑪。

第三に昇道決定とは、『雙卷經』に云く、「惡趣、自然に閉ぢ、昇（廿二丁左）道、窮極無し」⑤⑦と。

〔云云〕若し彼の國に生ずれば、娑婆の五道、自然にこれを離る。五道の因を離るる故に「閉」と云ふ。道を得ること深廣なる故に「無極」と云ふ。又、纔かに其の地に託すれば、便ち不退を得。故に『雙卷經』に云く、「其れ衆生有りて彼の國に生ずれば、皆悉く正定の⑬⑨聚に住す」⑤⑧と。〔云云〕正定は即ち是れ不退の異名なり。又、『小經』に云く⑬⑩、「阿彌陀佛國に生ぜんと欲する者は⑬⑪、皆阿耨菩提を退轉せざることを得」⑤⑨と。〔云云〕

意味を探る必要があるか。壽命を「無量」という。身体は思いのままである。常〔の徳も〕我〔の徳も〕体に備わっている。誰がかの極樂の功徳に迷おうか。四枯を厭い、四榮を願うべきである。淨業はこれによつて必ず成就することができる。この淨業に依るから果報もまた淨である。これは、仏に近いので仏の四徳に似ているのである。

ところで、また疑心胎生の人は、生まれたばかりのとき、享受する感官の対象は、ある時は第二忉利天のようで、夜摩天の宮殿に住むようなものである。〔夜摩天とは、『無量壽會』の文に見られる。〕世俗の凡夫であつても、どうしてその分際ではないことがあるうか。

第三に昇道決定とは、『無量壽經』にいう。「惡趣への道は自然に閉じ、覺りへの道を昇つてゆくことには極まりがない」云々と。もしかの極樂淨土に往生すると、娑婆世界の五道を自然に離れる。五道の因を離れるので「閉」といい、修行道を得ることは深く広いので「無極」（極まりがない）という。また一旦その地に往生しさえすれば、すなわち不退の位を得る。ゆえに『無量壽經』にいう。「衆生がいて、極樂淨土に往生すると、みなことごとく、必ず覺りを得る人々の集団に住する」云々と。「正定」とは、すなわち不退の異名である。また『阿彌陀經』にいう。「阿彌陀仏の極樂淨土に往生したいと思う者は、皆、無上正等菩提に向かつて退くことがない位に入ることが出来る」云々と。

⑬④底「皆」寛浄
「即」

⑬⑤底「準」寛大
「准」

⑬⑥底「決定菩
提」大「決定菩
提乎」

⑬⑦底「則」寛浄
「即」

⑬⑧底「已」大

此等の文に準ずる⑬⑤に、彼の土の衆生は決定して
無上菩提を成就す。豈に唯彼の土にして菩提を決定
するのみならんや⑬⑥。即ち此の界の中に於て、已に
決定を得。然る所以は、彼の國に生ずる者は、壽
(廿三丁右)命無量にして、即ち生ずれば、必ず一
生補處に至る。〈本願に見えたり。〉此の世界に淨土
を求むる者、決定して往生するが故にまた不退なり。
初心の菩薩、若し此の界に住すれば、大菩提に於て
則ち⑬⑦決定せず。

故に『起信論』に云く、「初學の人は退失を恐怖る。
淨土に生ずることを得れば、終に退有ること無し。
常に佛を見るが故に。」⑬⑧〈取意〉まさに知るべし。經
に言く、「生ぜんと願欲する時、已に不退なれば決
定してまさに不退の處に生ずべし。」⑬⑨

故に『稱讚淨土經』に云く、「如説に行ずる者は、
一切定んで阿耨菩提に於て不退轉を得。一切定んで
極樂世界に生ず」⑬⑩と。〈略鈔〉又『觀經』に説かく、
「下品生の人、彼の國に生じ已りて⑬⑪、七七(廿三

これらの經文に従うと、極樂淨土の衆生は、必ずこの上ない覺
りを成就する。どうしてただ極樂淨土において、覺りを決定する
のみであろうか。すなわちこの娑婆世界において、すでに決定を
得ている。その理由は、極樂淨土に往生する者は、壽命が計り知
れず、往生すると、必ず一生補處に至るからである。〈本願にみ
られる。〉⑬⑫この〔娑婆〕世界において淨土を求める者は、必ず往
生するのでまた不退である。初心の菩薩は、もしこの世界に居れ
ば、大菩提が決定してはいない。

ゆえに『大乘起信論』にいう。「初學の人は、退失を恐れる。
淨土に往生することができると、永遠に退失することはない。常
に仏を見るからである」と。⑬⑬〈取意〉「このように」理解すべきで
ある。經には、「往生したいと願ひ欲するとき、すでに不退であ
るから、必ず不退の場所に生まれるであろう」と説かれている。

ゆえに『稱讚淨土經』にいう。「〔仏の〕説かれた通りに修行す
る者は皆、必ず無上正等菩提について不退轉を得る。皆、必ず極
樂世界に往生する」と。⑬⑭〈略鈔〉また『觀經』に説く。「下品
〔上〕生の人は、極樂淨土に往生し終わって、七七日経った後、

「已或」

丁左) 日にして蓮華乃ち敷け、觀世音に遇ひて菩提心を發し、十小劫を経てまさに初地に入る⁽⁶⁴⁾」と。

〈淨影釋して云く、「彼の土の三小劫は、此の方の一阿僧祇劫に當る⁽⁶⁵⁾」と。而るに十小劫とは、良に極めて長し。〉或いは、六劫を経て蓮華乃ち敷け、法を聞きて發心す。〈種性地の發心なり⁽⁶⁶⁾。〉或いは、十二大劫に花開け、法を聞きて菩提心を發す。〈發心、前に同じ。此の三は即ち是れ下品の三生なり。〉

此等の衆生、彼の國に生じ已りて、經久に乃ち大菩提心を發し、不退の位に入る。世俗の凡夫、常没の類、寧ろ中に於て自ら分に非ずと憚るべけんや⁽¹³⁹⁾。

⑬⑨底 「非分」 ①
「非分乎」

⑭④底 「國土」 ①

⑭④底 「世界」

⑭④底 「往生論註」 ① ① ① ①

生論注」

⑭④底 「問」 ① ① ①

⑭④底 「欠く」

⑭④底 「耶」 ① ① ①

「乎」

蓮の花が開いて、觀世音菩薩に会つて、菩提心を發し、十小劫を経て「菩薩の」初地に入る」⁽⁶⁴⁾と。〈淨影(慧遠)が解釈している。「極樂淨土の三小劫は、この娑婆世界の阿僧祇劫にあたる」と。一方、十小劫とは実に極めて長い。〉あるいは、六劫を経て蓮華が開き、法を聞いて發心する。〈種性地の發心である。〉あるいは「下品下生では」十二大劫に蓮華が開いて、教えを聞いて菩提心をおこす。〈發心は前と同様である。この三つはすなわち下品の三生である。〉

これらの衆生は極樂淨土に往生し終わって、長い時間を経て大菩提心をおこし、不退の位に入る。世俗の凡夫で、常に迷いの世界に沈んでいる者達であっても、どうして自らその分際ではないと考へて、氣兼ねすることがあろうか。

故に『觀經』に云く、「亦、未來世の一切の凡夫、淨業を修せんと欲する者をして西方極樂國土⁽¹⁴⁰⁾に生ずることを得せしむ⁽⁶⁷⁾」。龍樹・天親(廿四丁右)並びに一切衆生と、共に極樂に生ぜんと勸む。〈龍樹の『十二禮』、天親の『往生論』。〉曇鸞法師の『往生論註』⁽⁶⁸⁾に云く、「問ふ⁽¹⁴²⁾。廻向章の中に「普共諸衆生往生安樂國」と言ふは、此れ何等の衆生と共なることを指すや⁽¹⁴³⁾。答ふ。『無量壽經』に云く、諸有る衆生、其の名號を聞きて、信心歡喜し、乃至一念、至心に廻向して、彼の國に生ぜんと

⑭底 「一切」 ⑤

「一切之」

⑭底 「外凡夫」

⑤ 「外道凡夫」

⑭底 「下下品」

⑤ 「下品」

⑭底 「頃」 ⑦

「頃」

⑭底 「金蓮華」

⑤ 「金色蓮花」

⑭底 「則」 ⑦ ⑧

「即」

⑭底 「註文」 ⑦

⑧ 「注文」 ⑤

「經文」

願すれば、即ち往生を得て不退轉に住す。唯五逆にして正法を誹謗するをば除く^⑦と。此を案じて言く、一切の⑭外凡夫⑭の人、皆往生を得。

又『觀無量壽經』の「下下品⑭生の如きは、或いは衆生有りて不善の業たる五逆十惡を作り、諸の不善を具す。(廿四丁左)此の如きの愚人、惡業を以ての故に、應に惡道に墮し、多劫を逕歷して苦を受けること窮まり無かるべし。此の如きの愚人、命終の時に臨んで善知識に遇ひて、十念を具足して南無無量壽佛と稱す。金蓮華の、猶し日輪の如くにして、其の人の前に住するを見る。一念の頃⑭の如くに即ち極樂世界に往生を得。蓮華中⑭に於て十二大劫を滿じて蓮華、方に開く。へまさに此れを以て五逆罪を償ふべし。」時に應じて則⑭ち菩提の心を發す^⑦と。此の經を以て證するに、明らかに知んぬ。下品の凡夫は、但だ正法を誹謗せず、信佛の因縁をもつて皆往生を得しむ。へ已上、『註』⑭の文。今一義を案ずるに、五逆の報果、臨終の時、重を轉じて輕く受く^⑦。謂く、十念の頃⑭、身の四大に於て、少しく

を除く」と。これらを考察していう。すべての外凡位の者であっても皆往生ができると。

またたとえば『觀無量壽經』の下品下生では、「あるいは衆生があつて、不善の惡業である五逆罪や十惡業を犯し、「その他」ありとあらゆる不善の行為を行う。このような愚かな人は、惡業によつて、当然三惡道におちて、永い間限りない苦しみを受けるべきである。このように愚かな人が命終わる時、「たまたま」善知識に会い、「南無無量壽佛」と欠けることなく十念を称える。「すると」太陽のように輝く金色の蓮華がその人の前に留まるのを見て、一瞬にでもあるかのようにただちに極樂世界に往生することができ。蓮華の中で、十二大劫の時間を経て、丁度その時蓮華の花が開く。へ当然これによつて五逆罪をつぐなのである。へ相応しい時にすなわち覺りを求める心を發す」と。この經(『觀經』)によつて証明すると、はつきりと理解できる。下品の凡夫は、ただ正法を誹謗せず、仏を信じることによつてみな往生することができると。へ以上は『往生論註』の文である。いま、ひとつの解釈をを考察するに、五逆罪の報いについては、臨終の時、重く受けるべきを轉換して輕く受ける。すなわち、十念している

⑮①底「頃」〔寛〕
「頃」
⑮②底「少」〔寛大〕
「小」

⑮②相撃すること有り。これ惡業の果なり。若し（廿五丁右）淨土に生ずれば、唯だ相似の等流果有るのみ。全く報果無し。淨土の生は極めて清淨なるを以ての故に、更に苦無きが故に。〕

⑮③底「已前」〔寛〕
「之前」
⑮④底「總」〔寛淨〕
「惣」
⑮⑤底「階降」〔寛〕
「階降心」〔淨〕
⑮⑥底「意」〔寛淨〕
「心」
⑮⑦底「云云」〔大〕
「欠く」

淨影釋して云く、「中品下生は是れ小乗の中の見道已前⑮③の世俗の凡夫なり。下品の三生は總じて⑮④善趣及び常没の人に通ず。未だ道位有らず。階降⑮⑤辨じ難し。」〔取意⑮⑥、畧鈔。善趣の位の中に未だ決定を得ず。故に「未有道位」と云ふ。云云⑮⑦。〕

⑮⑧底「人」〔寛淨〕
「欠く」
⑮⑨底「下劣凡夫得生」〔寛淨〕
「約凡夫生」
⑮⑩底「曰」〔寛淨〕

嘉祥の『疏』に云く、「善は弱く果は強しとは、下品の人⑮⑧は、都て善を修せずして大果を得るが故に。」云云。〔下劣の凡夫、淨土に生ずることを得れば⑮⑨、方に乃ち始めて大乘の初心に入る。〕

導和尚の『禮讚』に云く、「問うて曰く⑮⑩、今⑮⑪、

時、人間の身体の四大種（地・水・火・風）において、若干相打つことがある。これは惡業の果報である。もし、淨土に往生すれば、等流果に似た果報があるのみであり、全く「無間地獄の」報いはない。淨土に生まれることは、極めて清淨であつて、さらなる苦が無いからである。〕

淨影寺〔慧遠〕が解釈している。「中品下生というのは、小乗（声聞）の中の「無漏の智慧が働く」見道以前の世俗の凡夫である。下品の三生はすべて善趣および迷いの世界に沈んだ人に通じる。まだ「聖者の」修行の階位はない。位の上下を述べ難い。〔取意、畧鈔。善趣の位に対してもいまだ確定していない。であるから「未有道位」という。云々と。〕

吉藏の『觀經義疏』にいう。「善が弱く、果が強いというのは、下品の人は、「生涯」全く善を修めずに仏の覺りを得るからである。」云々と。〔下劣の凡夫は、淨土に往生することができると、まさにその時にはじめて大乘の初心の位に入る。〕

善導和尚の『往生礼讚』にいう。「問うていう。今、人を勧め

「欠く」

①61底「今欲」〔寛〕

①6「今以欲」

①62底「身」〔寛〕〔浄〕

「欠く」

①63底「言」①6

「云」

①64底「得生也」

①64大「得生」

①65底「上」〔寛〕〔浄〕

「欠く」

①66底「者」〔寛〕〔浄〕

「上者」

①67底「哉」〔寛〕〔浄〕

「乎」

人を勧めて往生せしめんと欲せば、未だ知らず、い
かんが安心・起行・作業して定んで彼の國土に往生
を得ん。答ふ。必ず彼の國土に往生せんと欲せば^{①6}
（廿五丁左）、『觀經』に説くが如き、三心を具すれ
ば必ず往生を得。〔乃至〕自身^{①62}は是れ煩惱を具足
せる凡夫、善根薄少にして三界に流轉して火宅を出
でずと信知し、今彌陀の本弘誓願、及び名號を稱す
ること下十聲一聲等に至るまで、定んで往生を得と
信知し、乃至一念も疑心有ること無し。故に深心と
名づく。〔云云〕既に「煩惱を具足せる凡夫」と言
ふ^{①63}。直だ是れ常没世俗の凡夫、往生を得るなり。

『觀經の疏』に云く、〔嘉祥〕「未だ現起せずと雖も、
而も未だ煩惱を斷ぜず、具足してこれ有り。^{①64}勝劣の
業を以て淨土に廻向すれば、命終に生ずることを得
^{①64}」〔已上^{①65}。〕「雖未現起」とは^{①66}、正しくは「雖
不現起」と云ふべし。然るに未來起るべきに望みて、
且く言ひて「未」と爲す。〔廿六丁右〕世俗の凡夫、
上界に生ずる時、猶ほ須らく欲を離れて八禪定を修
すべし。今此の安養、具縛の凡夫、能く往生を得る
こと、寧ろ奇に非ざるや^{①67}。

て往生させようと思うなら、どのような心構えでどのような行を
行い、どのような修行方法をとれば、必ずかの極樂淨土に往生で
きるのか。答える。必ずかの淨土に往生したいと思うならば、
『觀經』に説くところによれば、三心を具えれば必ず往生できる。
〔乃至〕わが身は、あらゆる煩惱を具えた凡夫であり、善根は少
なく、三界にさまよい、迷いの境界を出ることが出来なかったと
信じわきまえ、いま彌陀の本願は、名號を称えること〔生涯で〕
下はわずか十聲・一声の者に至るまで必ず往生できると信じわき
まえ、一瞬の間も疑う心が無い。ゆえに深心と名づける。云々
と。明らかに「あらゆる煩惱を具えた凡夫」という。ただ迷いの
世界の世俗の凡夫が往生を得るのである。

『觀經義疏』にいう。〔嘉祥大師〕「未だ現に生じるわけではな
いが、いまだに煩惱を斷ち切れず、すべて具えている。勝れた行
であれ、劣った行であれ、淨土に廻向すると、命の終わるときに
往生することができると。〔以上。〕「雖未現起」とは、正しくは
「雖不現起」というべきである。当然未來で起ることについて
とりあえず「未」とするのである。〔世俗の凡夫は、上二界〔色
界・無色界〕に生まれるときでさえ欲界を離れて八禪定を修めな
ければならない。いまこの極樂淨土へ、煩惱に縛られた凡夫が、
往生を得ることは考えられないことでないのか。〕

⑬⑧底「答」大

「欠く」

⑬⑨底「極下賤

薄」大「極下賤

具薄」

⑬⑩底「耶」寛浄

「乎」

⑬⑪底「乃生」大

「乃至」

⑬⑫底「豈」寛浄

「是」

⑬⑬底「則」大

「即」寛浄「即」

⑬⑭底「爾」寛

「尔」

答ふ⑬⑧。是れ極下賤薄⑬⑨の人と雖も、而も佛力に

依りて乃ち往生を得。〔問ふ。先づ罪業を減して方に往生を得。云何が此の人、煩惱を具するや⑬⑩。答

ふ。業は麤、惑は細なり。業麤なるを以ての故に、先づ減して乃ち生ず⑬⑪。煩惱は細なるが故に成じて往くことを得。云云。〕まことに以れば、此の人、

本是れ常没、善趣に鄰近せる下賤の人なるが故に、彼の國に生ずと雖も、久久に花開け、聞法發心して

後に方に位に入る。

問ふ。下輩の人、花胎の中に在りて經久徒然たり。豈に⑬⑫益無きに非ずや。

答ふ。花胎の中に在りて、十信の行に依りて其の心を修練す。則ち⑬⑬（廿六丁左）益無きに非ず。

問ふ。若し爾らば⑬⑭、十信は海印等の諸の三昧門を得て、十方界に於て能く作佛を現ず。何が故ぞ胎に在りて佛を見ざるや。

答ふ。花胎の中に在りて十信を修すと雖も、初生の時、未だ具足すること能はず。後に多劫を経て方に修滿すべし。又花開の早晩は業報に依りて言ふ。

【答】答える。これは極めて劣った人であっても、阿弥陀仏の

力によつてすなわち往生を得るのである。〔問〕問う。まず罪業を減してから往生を得る。どうしてこのひとは、煩惱を具えてい

るはずがあるのか。【答】答える。業は粗大で、煩惱は微細であるから具えていても往生することができる。云々と。〕

考えてみると、この人は、本来常に迷いの境界に沈み、善趣に近

い下賤の人であるから、極樂浄土へ往生しても、長い時間経つてから花が開き、教えを聞き發心した後〔菩薩の〕位に入る。

【問】問う。下輩の人は、蓮の花の胎内にいて長い時間を経る間することがない。利益がないではないか。

【答】答える。花の胎の中にいて、十信の行によつてその心を鍛鍊する。すなわち利益がないわけではない。

【問】問う。もしそうなら、十信は海印等⑬⑭の三昧の法門を得て、あらゆる世界において仏となった姿を現す。どうして胎内にいて仏を見ないことがあるうか。

【答】答える。蓮の花の胎中で、十信を修めても、往生したばかりの時は、まだすべての三昧を具えることはできない。後に永い時を経て修めつくすことができる。また、花が開く早い、遅い

⑪⑨底「爾」寛
「尔」

三昧神通は多く内心に依る。此の界の人の如き、神通を修習すれば、異形を變化し、他界に飛上す。若し果報に約すれば即ち爾る⑪⑨こと能はず。彼の土の衆生、二義あることもまた然なり。

⑪⑩底「若生彼國
久久」寛⑪⑨「若
生彼國久」大
「若爾彼國久
久」

問ふ。若し彼の國に生じて久久に⑪⑩花開き、漸く道に入るといはば、何が故ぞ天親の『往生論』に「五念門を⑪⑩修して自利他すれば、速やかに（廿七丁右）阿耨菩提を成就することを得⁸¹」と云ふや⑪⑩。

⑪⑦底「五念門」
寛⑪⑨「五念門
行」
⑪⑧底「乎」大
「耶」

答ふ。若し此の五念門を修せざれば、猶ほ穢土に住して決定して大菩提を得ること能はず。若し此の行を修すれば、便ち淨土に生じて終に退轉無く、定んで菩提を得。故に「速疾」と云ふ。又彼の土に生じて、不退に住するが故に、三昧門・陀羅尼門に依

は業の報によつて説き分けられている。三昧神通の多くは内なる心による。たとえばこの娑婆世界の人は、神通力を身につけると、異なつた姿を化作して、他の世界まで飛んでゆく。「しかしその人の身は娑婆世界にある」。もし「実際の」果報については、そのようなことはできない。かの極樂淨土の衆生に二通りあること（身体は花が胎内にありながら心では他の世界に行くこと）もまたこの通りである。

【問】問う。もしかの極樂淨土に往生して永い時間を経て花が開き、ようやく聖者の位を得るというのであれば、どうして天親の『往生論』に「五念門の修行を修めて、自利他すれば、速やかに無上の覺りを成就することができる」というのか。

【答】答える。もしこの五念門を修めないと、相変わらずこの娑婆世界にとどまって必ずしも大菩提心を得ることはできない。もしこの「五念門の」行を修めれば、すなわち淨土に往生して、永遠に退轉することなく、必ず覺りを得る。ゆえに「速疾」というのである。またかの極樂淨土へ往生して、不退轉の位にあるか

⑬底 「智論」 ⑭

⑮ 「地論」

⑯底 「作佛」 ⑰

「似佛」

りて速やかに菩提を得て長劫を逕ず。へ『智論』⑬に説くが如き、三昧・陀羅尼の故に能く作佛⑯す。云云。若し此の界に住すれば、是の如くなることは能はず。相對して知るべし。昇道是の如し。

第四に種子決定とは、此に二義有り。一には、中道佛性。これ佛因を成ず。または正因と名づけ、または本覺と名づく。衆生、本來（廿七丁左）此の覺性有り。此の性に由るが故に必ず解脱を得。道理然りと雖も、若し聞法發心等の縁無くんば、此の性、自然に解脱すること能はず。今、釋迦、西方の教へを説きたまふに遇ひて、聞きて而も奉行するに、内に佛性有りて、此の外縁を待ちて、因縁具足して必ず應に出離すべし。

⑱底 「則」 ⑲
「即」 ⑳
⑲底 「則」 ㉑
「即」 ㉒

又生死に終り有り。今生を以て終りと爲す。菩提に始め有り。淨土を即ち始めと爲す。まことにいれば、一夕の眠り有れば、則ち㉑一朝の覺有り。長夜の昏寢有れば、則ち㉒朗然の大寤有り。衆生の身中に既に作佛の理有り。我等が身中に寧ぞ往生の理無からんや。

ら、三昧門や陀羅尼門に依つて速やかに覺りを得て長い間を経ることはない。へ『大智度論』に説かれている通り、三昧や陀羅尼によつて仏となることができる。云々と。若しこの娑婆界に留まれば、そのようになることはできない。對比して理解すべきである。覺りへの道を昇つてゆくことは以上の通りである。

第四に種子決定とは、これには二つの意味がある。第一に中道佛性。これは仏の因となつてゐる。または正因と名付け、または本覺と名付ける。衆生には本來この覺りの本性がある。この本性に依るから必ず解脱を得ることができる。「ただし」道理はその通りであるが、もし、教えを聞き、菩提心を發すなどの縁がなければ、この本性「だけによつて」自然に解脱することはできない。いま釈尊が西方淨土のみ教えをお説きになつてゐるのに遭遇して、「その教えを」聞いて、しかもそれを奉じて実践すると、内面に仏性が有つてこの「聞法發心等の」外的な縁を待つて、因縁を具足して必ず覺りの境地に入るであらう。

また生死にも終わりがあつた。今生をもつて終わりとす。覺りにも始まりがある。淨土を始まりとする。実に考えてみると、一夕の眠りがあるなら、一朝の目覺めがある。長い夜の眠りがあれば、しっかりした大いなる目覺めもある。衆生の体の中には既に仏となる道理がある。私たちの体の中にどうして往生できる道理が無いといえようか。

⑬③底「更見世尊」⑬④底「見佛世尊」⑬⑤大「更見佛世尊」

⑬⑥底「則」⑬⑦底「則」⑬⑧底「則」⑬⑨底「則」⑬⑩底「則」⑬⑪底「則」⑬⑫底「則」⑬⑬底「則」⑬⑭底「則」⑬⑮底「則」⑬⑯底「則」⑬⑰底「則」⑬⑱底「則」⑬⑲底「則」⑬⑳底「則」⑬㉑底「則」⑬㉒底「則」⑬㉓底「則」⑬㉔底「則」⑬㉕底「則」⑬㉖底「則」⑬㉗底「則」⑬㉘底「則」⑬㉙底「則」⑬㉚底「則」⑬㉛底「則」⑬㉜底「則」⑬㉝底「則」⑬㉞底「則」⑬㉟底「則」⑬㊱底「則」⑬㊲底「則」⑬㊳底「則」⑬㊴底「則」⑬㊵底「則」⑬㊶底「則」⑬㊷底「則」⑬㊸底「則」⑬㊹底「則」⑬㊺底「則」⑬㊻底「則」⑬㊼底「則」⑬㊽底「則」⑬㊾底「則」⑬㊿底「則」

⑬㉞底「修」⑬㉟底「修」⑬㊱底「修」⑬㊲底「修」⑬㊳底「修」⑬㊴底「修」⑬㊵底「修」⑬㊶底「修」⑬㊷底「修」⑬㊸底「修」⑬㊹底「修」⑬㊺底「修」⑬㊻底「修」⑬㊼底「修」⑬㊽底「修」⑬㊾底「修」⑬㊿底「修」

⑬㉞底「甚」⑬㉟底「甚」⑬㊱底「甚」⑬㊲底「甚」⑬㊳底「甚」⑬㊴底「甚」⑬㊵底「甚」⑬㊶底「甚」⑬㊷底「甚」⑬㊸底「甚」⑬㊹底「甚」⑬㊺底「甚」⑬㊻底「甚」⑬㊼底「甚」⑬㊽底「甚」⑬㊾底「甚」⑬㊿底「甚」

⑬㉞底「努力」⑬㉟底「努力」⑬㊱底「努力」⑬㊲底「努力」⑬㊳底「努力」⑬㊴底「努力」⑬㊵底「努力」⑬㊶底「努力」⑬㊷底「努力」⑬㊸底「努力」⑬㊹底「努力」⑬㊺底「努力」⑬㊻底「努力」⑬㊼底「努力」⑬㊽底「努力」⑬㊾底「努力」⑬㊿底「努力」

二つには、西方の行者は必ず宿善有り。故に（廿八丁右）『雙卷』に云く、「若し人、善本無くんば此の經を聞くことを得ず。清淨有戒の者、乃ち正法を聞くことを獲。曾て更に世尊を見たてまつるもの⑬③、則ち⑬④能く此の事を信ず」^{⑬⑤}と。

又『念佛三昧經』に云く、「諸佛の所とに於て久しく善根を修するもの⑬⑥、則ち能く此の三昧王の名を聞くことを得」^{⑬⑦}と。〈略鈔〉『平等覺經』に云く、「其の世間の帝王・人民・善男子・善女人、前世の宿命に善を行ぜしが致す所なり。相祿て遇ちまさに無量清淨佛の聲を聞きて發心歡喜すべし。我これに代りて喜ぶ」^{⑬⑧}と。〈云云〉安養の行者は、宿善既に大なり。甚だ⑬⑨自愛すべし。ゆめゆめ⑬⑩輕んずること莫れ。自ら宿福の甚幸なることを知る。何ぞ當來の勝利を疑はん。

問ふ。西方（廿八丁左）淨土の教門を聞くこと有りて、誹謗毀訾して而も修行せず、或いは謗せずと

第二には、西方の行者には必ず宿善がある。故に『無量壽經』にいう。「もし人があつて〔前世で〕善根功德を積まなかつたのであれば、〔この世において〕この經を聞くことはできない。清淨で戒法を修行した者は、〔この世において〕仏の正しい教えを聞くことができる。前世でさらに諸仏如来にまみえた者は、このことを信じることができる」と。

また『念仏三昧經』にいう。「諸仏のみもとにおいて長く善根を修めた者は、すなわちこの三昧の王（念仏三昧）の名を聞くことができる」と。〈略鈔〉『平等覺經』にいう。「その世間の帝王・民衆・善男子・善女人であるのは、過去の生涯において善行を行つた結果である。幸いにもやと阿彌陀仏の名を聞いて發心歡喜するだろう。私はこれに代わつて喜ぶ」云々と。極樂往生を目指す行者は、過去世で行つた善が現に大きい。大いに自負すべきである。決して卑下してはならない。おのずから、過去世に積んだ功德がみごとであつたことがわかる。どうして將來の勝れた利益を疑えようか。

【問】問う。①西方淨土の教えを聞くことがあつても、誹謗中傷して修行をせず、あるいは、②誹謗しないとはいつても、五欲^{⑬㉞}

⑬⑧底「土」Ⓐ

「欠く」

雖も、五欲、心を纏ひて往生を願ぜず。是の如きの類、豈に宿善有らんや。何ぞ「必ず宿善有るもの乃ち浄土⑬⑧の教を聞くことを得」と言ふや。

答ふ。此の二類の人は、聞けども聞かざるが如し。

誠に言ふ所の如く、善本有ること無し。而も有りと言ふは、信樂するものに據るのみ。〈感師の意なり。〉更に二類有り。一つには阿彌陀佛と宿願の縁有りて、浄土の教へを聞きて浄土を願求す。而れども復た懈怠にして更に十惡を造る。或いは重病心を失ひ、或は善友に逢はず。但だ是れ空願にして、未だ修行有らず。前の二類に望むるに遠生の義有り。經には歎じて⑬⑧「生ず」と説き、論師は釋して（廿九丁右）別時意趣と爲す。

⑬⑧底「歎」Ⓐ

「難」

⑬⑨底「中」Ⓐ

「中之」

更に一類有り。煩惱輕微に願行具足して即ち往生を得。別時意に非ず。⑬⑧。〈此れ即ち感師前文の残りなり。別時意とは『攝大乘論』の四意趣の中の⑬⑨又一種なり。意の云く、「經は別時に往生を得るに約するが故に『浄土に生ず』と説く。即生するには非ず。』と。感師解して云く、「第三類に約して、判じて別時と爲す。若し第四に約すれば便ち別時に非ず。

が心に纏わりついて往生を願わない。これらのたぐいは、どうして宿善があるうか。どうして「必ず宿善ある者は浄土の教を聞くことができる」というのか。

【答】答える。この二種の人々は、「教えを」聞いても聞いていないのと同じである。確かに「あなたが」という通り、「彼らには」善根があるはずもない。「有る」というのは「教えを」信じる人について言っただけである。〈懷感の考えである。〉さらに二種の人々がある。③一つは阿彌陀仏との間に過去世の誓願による縁があり、浄土の教えを聞いて浄土（への往生を）願ひ求める。しかしまた怠け心があつてさらに十惡を犯す。あるいは重病で氣を失ひ、あるいは善知識に遇わない。ただこれは空しく願うのみでいまだに修行を積んではない。前の二種の人々と比較すれば「遙か遠い先に往生する」という意味がある。經典には稱賛して「往生する」と説き、論師解釋して、「別時意趣」とする。

④さらに一種の人々がある。煩惱が輕微であり、誓願と修行が共に具わつていてすなわち往生できる。別時意ではない。〈これはすなわち懷感禪師の先の文の残りである。別時意とは、『攝大乘論』の四意趣の中のまた一種である。意味するところは、「經は遠い未来に往生することができるとについて『浄土に往生する』と説く。すぐに往生するのではない』と。懷感禪師が解釋している。『第三種の人々について、判別して『別時』（遠い将来に

①①底「遂」寛浄
「還」

更にこれを悉くすべし。」後の二が中に就きて、前人は宿縁有り。而も修行せざるは餘縁障るが故なり。宿縁少きが故に、後、遂に①①生ずることを得。猶ほ勝利有り。此の第三の類、若しは勝縁に遇ひ、或は自ら覺發勤勵する者は、また第四類に同ずることを得べし。

①②底「準」寛大

浄「准」

①③底「則」寛浄

「即」

①④底「發覺」寛

浄「發足」

①⑤底「今」寛

「令」

①⑥底「以」寛浄

「欠く」

故に感師云く、「或は重病を得、善友に遇はざれば、往生を得ず」と。此の釋文に準ずるに①②、既に

「或」の言を置く。(廿九丁左) 則ち①③第三類の人、定んで生ぜざるには非ず。先に懈怠し、或は重病等と雖も、或は善友に遇ひ、或は自ら發覺①④して前過を改悔せば、或は往生を得。即ち第四に同じ。『觀經』に下品生を説くが如し。〈又一義に云く、「若し善友に遇ひて發悟して生ずるは、只是れ第四なり。

今①⑤、即生せざるを取りて、以て①⑥第三類とす。又第三の人、若し浄土に願生すること有れば、先來所修の世間の善業、自ら業因と爲る。又願求の心とは、即ち修心の往生なり。又即ち此の心相應の思業、既に行業と爲る。而るに《但だ是れ空願にして未だ行有らず。》と言ふことは、まさに是れ隱顯して言ふ

往生することとする。もし第四種の人々についていえば、すなわち『別時』ではない。さらにこれについて詳しく理解を深めよ」と。後の二種の人々の中で、前の人々は宿縁がある。修行しないのは他の縁が障害となるからである。宿縁が少ないから後になつてついに往生することができる。それでも勝れた利益がある。この第三種の人々で、もし勝れた縁に遇い、あるいは自らめざめて「修行に」励む者は、また第四種の人々と同じようになることができる。

故に懷感禪師がいう。「或いは重病を得て、善知識に遇うことがなければ、往生できない」と。この釈文に準じると、まさしく「或いは」の語を置いている。すなわち第三種の人々は、必ずしも往生できない訳ではない。先に怠惰であり、あるいは重病等であつても、善知識に遇い、あるいは自らめざめて先の過ちを悔い改めれば、あるいは往生できる。すなわち第四種の人々と同じである。『觀經』に下品の往生を説いている通りである。〈また一つの解釈にいう。「もし善知識に遇い、めざめて往生する者は、ただ第四種の人々である。ここでは「死後」すぐには往生しないことを取り上げて第三種の人々とするのである。また第三種の人々は、もし浄土に生まれることを願うなら、過去世から修めた世間の善業が、おのずから往生のための因となる。また、「往生を」願い求める心というのは、すなわち「心が乱れないように」修行に専念して得られる往生である。また、すなわちこの心と相應す

なるべきのみ。行業微なるを以て、但だ類と名づくと。」

問ふ。現に今の學者、有るが云く、「若し過去に於て、曾て道心を發すを以て善本と爲さば、現には少念と雖も淨土に生ずることを得ん。若し過去世に大善無くんば、今、勤修すと雖も往生すること能はず」といふは、(三十丁右) 此の義、爾るべしや。

答ふ。此の義、然らず。前に引く所の經、其の義分明なり。但だ是れ念佛の人は、皆宿善有るが故なり。然るに感師の意、第三類の人は、宿願の緣有れども而も即生せざること、まさに是れ前生に一往教へを聞けども而も心極めて劣なるものなるべし。是の故に、今世に勤勵すること能はず。また即生せず。但だ是れ今生に勤勵する者は、皆往生を得。故に知んぬ。念佛して淨土を勤求するは、定んで往生を得。必ず善本有りて種子と爲すなり。

又前に微善有りて、今、經を聞くことを得て、此の身に因を修して、後、淨土に生ず。凡そ因縁の理は微より^①著に至る。宿善を執して今の業を廢する

る思業がまさしく「往生のための」行業となつてゐる。」さて、「ただこれは空しく願うのみであつていまだに修行を積んではいない。」と言うのは、これは隱顯^②であることによつて述べただけである。行業がわずかであることによつて、ただ類と名付ける。」

【問】問う。現に今の學僧の一部が、「もし過去世において、菩提心を發したことを善根とするならば、現世では、少し念仏しただけでも淨土に往生することができらう。「しかし」もし過去世に大善根が無ければ、現世で修行に励んだとしても往生することはできない」というが、この解釈は正しいか。

【答】答える。この解釈は正しくない。前に引いた經は、その意味がはっきりしている。ただ、念仏する人には、皆、宿善があるからである。ところが懷感禪師の考えでは、第三種の人々は、過去世の誓願という縁があつてもすぐさま往生しはしない。まさにこれは、前世で一応教えを聞いてはいるが、心が極めて劣つた者であらう。故に、現世で励むことができない。またすぐに往生することもない。ただ現世で修行に励む者は、皆往生ができる。故に、念仏して淨土を求める者は確実に往生できると理解できる。必ず善根があつて「往生の」種子とするのである。

また前世にわずかな善があつて、現世に經を聞くことができ、この「現世での」身に「往生のための」因を修め、後の生涯で淨土に往生する。およそ因縁の道理は微細なものからより顯著なもの

「微善」

こと勿れ。(三十丁左)

故に經に説きて言く、「一世の勤苦は須臾の間なりと雖も、後に無量壽國に生じて快樂極まり無し⁽⁹⁴⁾」と。

〈云云〉既に「一世勤苦」と言ふ。必ずしも宿善を須⁽⁹⁵⁾るず。まさに知るべし。前の結縁に由りて、今、

彌陀を聞きて、今、始めて因を修して次に⁽⁹⁸⁾淨土に生ず。此れは是れ、『智論』の小因大果、また即ち『瑜伽』の功少利多なり。

⁽⁹⁸⁾底「次」⁽⁹⁹⁾天
「以」

⁽¹⁹⁸⁾底「其」⁽⁹⁹⁾寛大
「共」

又『楞伽經』に云く、「淨土の相を説くを聞く時、其の心を即ち佛性と爲す」と。〈經には「外刹殊勝⁽⁹⁶⁾」と名づく。今淨土殊勝の相を聞き、〈『觀經』『雙卷經』等の如し。〉其の文句に隨ひて、次第に心を生ず。説く所の國土、粗ば心想に現ず。世人の共⁽⁹⁹⁾會して他國の事を説くに、聞く者、相領するが如し。經の中に既に(三十一丁右)淨土の教へを聞きて、一往領解するを以て判じて佛性と爲す。何ぞ此を以て淨土の種と爲さざらん。自ら宿善の有無を疑ひて、更に往生の大利を失すること勿れ。

のに至る。宿善にとらわれて現世の修行をやめるようなことがあつてはならない。⁽⁹³⁾

故に「『無量壽』經」(卷下)に説いていう。「この世で熱心に修行を務めること(一世勤苦)は、ほんの短い間であつても、後に極樂淨土に往生してその楽しみは極まりが無い」云々と。現に「一世勤苦」といつている。必ずしも宿善を必要とはしない。まさに「前世の結縁によつて現世では、阿弥陀仏の名を聞き、今初めて因を修めて次の世に淨土へ往生する」と理解すべきである。これは、『大智度論』にいう「小さな因で大きな結果を得る」「という説」であり、また『瑜伽師地論』に説く「わずかな功德で利益が多い」「という説」にあたる。

また『楞伽經』にいう。ことには、「淨土のありさまを説いているのを聞く時、その心をすなわち仏性とする」と。〈經には「外刹殊勝」と名付けている。〉今、淨土の勝れたありさまを聞いて、〈『觀經』『無量壽經』等に説く通りである。〉その文言に従つて次第に心を生じる。説かれてある國土は、ほぼ心の想いに現れる。世間の人が共に会つて「誰かが」他の国のことを説くと、聞く者は、互いに分かり合うようなものである。經の中で既に淨土の教へを聞いて、一応會得することを判断して「それを」仏性とする。どうしてこれを淨土の種としないことがあるうか。自ら宿善の有無を疑つて、さらに往生という大きな利益を失つてはならない。

種子の義、略して以て斯の如し。

種子決定の意味は概括すると以上の通りである。

【註記】

- (1) 『無量寿経』三輩段と『観経』九品を挙げているが典拠不明である。『無量寿経』（『大正蔵』一二、二七八頁上一〇行・『浄全』一、三三頁八～一二行）と、『観無量寿経』（『大正蔵』一二、三四五頁中～三四六上・『浄全』一、五〇頁五～一一行）の取意文であると考えられる。
- (2) 『無量寿経』（『大正蔵』一二、二七八頁上二三～二四行〈坂上〉・『浄全』一、三三頁一四行）
- (3) 「檀」は *stādana*（施し）の音写である。分檀と布施は共に同義。（辛島静志「大阿弥陀経」訳注（1）『佛教大学総合研究所紀要』六、一九九九）を参照。
- (4) 底本では「之_二」となっているが、ここでは「之_ヲ」と読み替えた。
- (5) 底本では「知_三益_一」となっているが、ここでは「知_三益_一」と読み替えた。
- (6) 底本では「重行レリ」となっているが、「重行セリ」と読み替えた。
- (7) 『平等覚経』（『大正蔵』一二、二九二頁上五～中二三行〈坂上〉・『浄全』一、八六頁上二～八七頁上九行）
- (8) 『過度人道経』（『大正蔵』一二、三一〇頁上二〇行～下四行）に『平等覚経』の引用文と類似した箇所が確認できる。
- (9) 『遊心安樂道』（『大正蔵』四七、一一三頁中二一～二二行〈坂上〉・『浄全』六、六二二頁下一〇～一一行）。永観『往生拾因』（『大正蔵』八四、九六頁下二一～二二行・『浄全』一五、三八三頁上九行）にも同様の引文あり。
- (10) 『十住毘婆沙論』（『大正蔵』二六、四三頁中一八～一九行〈坂上〉）他にも『浄土論』、『楽邦文類』、『往生要集』等に同様の引文あり。
- (11) 『後出阿弥陀仏偈』（『大正蔵』一一、二七八頁中二九～下一行〈坂上〉）
- (12) 『無量寿経』（『大正蔵』一二、二七八頁上一八～一九行〈坂上〉・『浄全』一、三三頁一一行）
- (13) 『大宝積経』無量寿如来会（『大正蔵』一一、一〇〇頁中一八～一九行〈坂上〉）
- (14) 『観無量寿経』（『大正蔵』一二、三四六頁上二三行・『浄全』一、五〇頁二行）下品中生に「六劫」とあり。
- (15) 『無量寿経』（『大正蔵』一二、二六七頁下九～一〇行・『浄全』一、六頁七行）に「十二劫」とあり。また、珍海が『決定往生集』の中で用いる『平等覚経』、『過度人道経』等にも用例がある。
- (16) 『観無量寿経』（『大正蔵』一二、三四五頁中一行・『浄全』一、四八頁三行）上品下生。
- (17) 『観無量寿経』（『大正蔵』一二、三四五頁下二二行・『浄全』一、四九頁九行）下品上生。
- (18) 『決定往生集』序論において珍海が提示している三種の決定。①果決定、②因決定、③縁決定のこと。
- (19) 床、寢床、腰かけという意味であるが、ここでは「蓮台」と訳した。
- (20) 源信『往生要集』大文第二「欣求浄土」の第四「五妙境界楽」を参照されたい。
- (21) 『菩薩從兜術天降母胎説広普経』（『大正蔵』一二、二八頁上一四～二〇行〈坂上〉）
- (22) 永観『往生拾因』（『大正蔵』八四、九七頁上四～七行〈坂上〉・『浄全』一五、三八三頁下二～四行）
- (23) 『法華経』所説、法華七喻の一つである化城喻品。小乗の覚りは、

大乘の『法華經』の覺りへと至るための方便であるとする比喩。

- (24) 『釈淨土群疑論』（『大正藏』四七、五〇頁下一四～一七行・『淨全』六、四九頁下七～一〇行）に該当すると考えられる文言が確認できる。
- (25) 『釈淨土群疑論』（『大正藏』四七、五〇頁下一七行〈坂上〉・『淨全』六、四九頁下一〇行）
- (26) 底本では「且ツ」となっているが、「且ク」と読み替えた。
- (27) 珍海が分類する各三類の得失について、得とは『無量壽經』の三輩段であると述べ、失の三類とその典拠となる經論は「正果決定」の中から以下のように見出せる。

【上品の失】教えを聞いて誹謗し、地獄に墮ちること。『平等覺經』

【中品の失】懈慢国に生れること。『菩薩處胎經』

【下品の失】疑心胎生『十住毘婆沙論』

尚、珍海の得失解釈については、拙稿「決定往生集」における暫信暫不信の得失―辺地胎生の構造―（『佛教大学大学院紀要』四八号、文学研究科篇、二〇二〇、三月刊行予定）を参照されたい。

- (28) 現代語訳での〇数字は内容理解のために適宜挿入したものである。
- (29) 執着心が固くない者のこと。
- (30) 覺りへ至るための道の数。
- (31) 『阿弥陀經』（『大正藏』一二、三四六頁下一〇行・『淨全』一、五二頁九行）
- (32) 『平等覺經』（『大正藏』一二、二八三頁上一～二行〈坂上〉・『淨全』一、六六頁下四～五行）
- (33) 『過度人道經』（『大正藏』一二、三〇三頁中一八～一九〈坂上〉）
- (34) 『菩薩從兜術天降母胎說広普經』（『大正藏』一二、一〇二頁上二二行）
- (35) 吉藏『大乘玄論』の中に当該箇所見当たらず。珍海『大乘玄問答』（『大正藏』四五、六七頁下）には「下輩生於花中、退菩提心。出生之後、受二乘果。」とあり。

(36) 「得二」を「得三」と読み替えた。

- (37) 『釈淨土群疑論』（『大正藏』四七、六八頁上一四～中一行、〈坂上〉・『淨全』六、下一六～上一二行）
- (38) 『平等覺經』（『大正藏』一二、二九二頁中一二～一三行〈坂上〉・『淨全』一、八六頁下一六～一七行）
- (39) 善導『觀經疏』（『大正藏』三七、二六四頁上一三～一七行〈坂上〉・『淨全』二、四〇頁下四～六行）
- (40) 善導『往生礼讃』（『大正藏』四七、四三九頁下二行〈坂上〉・『淨全』四、三五七頁上一二行）
- (41) 『觀無量壽經』（『大正藏』一二、三四二頁上二八～二九行・『淨全』一、四〇頁一三行）に説かれる「心得無疑」のこと。
- (42) 『無量壽經』（『大正藏』一二、二七二頁下七～一〇行・『淨全』一、一七頁三行）に「咸同一類、形無異狀。但因順餘方。故有天人之名。顏貌端正、超世希有。容色微妙、非天非人。皆受自然虛無之身、無極之體。」と有り。
- (43) 迦才『淨土論』（『大正藏』四七、一〇三頁上五行〈坂上〉・『淨全』六、六六八頁下一五行）
- (44) 俱舍論では、(1) 神通を得るためには禪定に入る必要があるとされる。(2) 相好の業は、菩薩が三阿僧祇の行を終えた後、百劫にわたり積むとされる。（上記二点は本庄良文先生よりご教示賜った。）
- (45) 四十八願中の第一五願（眷属長寿願）（『大正藏』一二、二六八頁上二〇～二二行・『淨全』一、七頁一二行）を指す。
- (46) 「常」・常住永遠、「樂」・楽しみ、「我」・自在無碍、「淨」・清淨
- (47) 常樂我淨に対する正しい理解。
- (48) 常樂我淨に苦、空、無常、無我の誤った考えを起こすこと。
- (49) 『無量壽經』所説、四八願中の第二一願（三十二相願）（『大正藏』一二、二六八頁中六～七行・『淨全』一、八頁三行）
- (50) 『無量壽經』所説、四八願中の第一五願（眷属長寿願）（『大正藏』

- (51) 一二、二六八頁上二〇～二二行・『浄全』一、七頁一一行
「芥」には、小さいもの。細かいものという意味を有す。
- (52) 築島裕、坂詰力治、後藤剛編『最明寺本往生要集』索引篇、(二〇〇三、汲古書院) 六三三～六三三頁参照。
- (53) 「天下」は人間の住まう四大洲のこと。
- (54) 「百億」の「億」とは実際には一千万であり、「百億界」は三千大千世界のこと、「娑婆世界」を言い換えたものである。
- (55) 人間の身体に付属する不浄な三十六種のことを指す。外には毛髪、爪などの十二種、内外の中間に皮膚、血などの十二種、内に心臓、肝臓、肺などの十二種のこと。
- (56) 『大宝集経』無量寿如来会(『大正蔵』一一、一〇〇頁上二〇行)に「如夜摩天處於宮殿」とあり。
- (57) 『無量寿経』(『大正蔵』一二、二七四頁中二三～二四行〈坂上〉・『浄全』一、二四頁六行)
- (58) 『無量寿経』(『大正蔵』一二、二七二頁中八～九行・『浄全』一、一頁九頁三行)
- (59) 『阿弥陀経』(『大正蔵』一二、三四八頁上二四～二五行〈坂上〉・『浄全』一、五五頁九～一〇行)
- (60) 『無量寿経』四十八願中、第三「寿命無量願」(『大正蔵』一二、二六八頁上二〇～二二行・『浄全』一、七頁八～一〇行)と第二二「必至補所願」(『大正蔵』一二、二六八頁中八～一四行・『浄全』一、八頁四～八行)のこと。
- (61) 『大乘起信論』真諦訳(『大正蔵』三三、五八三頁上二二～一六行〈坂上〉)の取意文。
- (62) 典拠不明。
- (63) 『称讃浄土仏摂受経』(『大正蔵』一二、三五一頁上二三～一五行〈坂上〉)
- (64) 『観無量寿経』(『大正蔵』一二、三四五頁下一九～二五行〈坂上〉・『浄全』一、四九頁八～一一行)の取意文であると考えられる。
- (65) 浄影『観無量寿経義疏』(『大正蔵』三七、一八二頁中八～一一行〈坂上〉・『浄全』五、一九〇頁下八～一一行)の取意文。
- (66) 種性住のこと。種性住とは、未発心の位で六種住の一つ。
- (67) 『観無量寿経』(『大正蔵』一二、三四一頁下七～八行〈坂上〉・『浄全』一、三九頁六行)
- (68) 龍樹『十二礼偈』のことであるが確認できない。迦才『浄土論』(『大正蔵』四七、九六頁下二行～九七頁上八行・『浄全』六、六五五頁上九行～六五六頁上二〇行)、善導『往生礼讃偈』(『大正蔵』四七、四四二頁上二七行～四四二頁下二六行)に引用されている。
- (69) 世親『往生論』(『大正蔵』二六、二三一頁中六行)に「普共諸衆生、往生安樂國。」とある。
- (70) 曇鸞『往生論註』(『大正蔵』四〇、八三三頁下二〇～八三四頁二二行〈坂上〉・『浄全』一、二三四頁下一六～二三五頁上一六行)この『論註』の問答において引用される『無量寿経』の典拠としては、(『大正蔵』一二、二七二頁下一一～一四行〈坂上〉・『浄全』一、一頁九頁四～五行)
- (71) 『観無量寿経』(『大正蔵』一二、三四六頁一二～二三頁〈坂上〉・『浄全』一、五〇頁上五～九行)
- (72) 転重軽受のこと。悪業を転じて苦果を軽く受けること。
- (73) 浄影『観無量寿経義疏』(『大正蔵』三七、一八二頁下一七～二二行〈坂上〉・『浄全』五、一九一頁下七～一一行)の取意文。
- (74) 吉蔵『観無量寿経義疏』(『大正蔵』三七、二四五頁中二〇～二四行〈坂上〉・『浄全』五、三五一頁上一～四行)の取意文。
- (75) 底本では、「欲二往生彼國土」となっているが、「欲三往生彼國土」と訂正した。
- (76) 善導『往生礼讃』(『大正蔵』四七、四三八頁下二～一〇行〈坂上〉・『浄全』四、三五四頁下一～一二行)
法然『選択集』(『浄全』七、四四頁一二～四五頁四行)にも同じ箇所引用が確認できる。

(77) 善導『往生礼讃』（『大正蔵』四七、四三八頁下七行・『浄全』四、三五四頁下九行）

法然『選択集』（『浄全』七、四五頁三行）源信『往生要集』（『浄全』一五、八九頁下五行）にも用例が確認できる。

(78) 底本「有之」となっているが、「有_レ之」と訂正した。

(79) 吉蔵『観無量寿経義疏』（『大正蔵』三七・二三五頁下一〇～一二行〈坂上〉・『浄全』五、三二九頁下一〇～一二行）

(80) 海印とは、海中にすべての物事を印で押したようにはっきり映し出すこと。

海印三昧とは、釈迦が『華嚴経』を説く時に入った三昧の境地のこと。あるいは覺りを得た仏の心に一切が現れることを示したもの。
(81) 世親『往生論』（『大正蔵』二六・二三三頁上二四～二五行〈坂上〉）には「菩薩如是修五門行自利利他。速得成就阿耨多羅三藐三菩提故。」とあり。

(82) 『無量寿経』（『大正蔵』一二、二七三頁上二八～中二行〈坂上〉・『浄全』一、二二一頁四～五行）

(83) 『大方等大集経菩薩念仏三昧分』（『大正蔵』一三、八二〇頁下二一～二三頁〈坂上〉）

(84) 『平等覚経』（『大正蔵』一二、二九九頁中二三行～二五行〈坂上〉・『浄全』一、一〇二頁上二～三行）

(85) 懷感『釈浄土群疑論』（『大正蔵』四七、四〇頁上一四～一九行・『浄全』六、二六頁上一～六行の取意文であろう。）

(86) 感覺の対象（色・声・香・味・触）

(87) ここで説示される「論師」とは、金子寛成『釈浄土群疑論の研究』（二〇〇六、大正大学出版会）二九一頁では、「一の第三類の衆生について述べる中で、『撰大乘論』の唯発願の釈文はこのことを指して別時意といったのである。（中略）つまり『撰論』に説く念仏別時意は第三の人を指しているというのが懷感の主張である。」と指摘していることから世親のことであろう。また、道中撰『群疑論探要記』

（『浄全』六、二五〇頁下一）に「答。梁隋二論及、唐世親釋論之中、同前別時舉於此譬、無性釋論、釋二別時後用此譬。故彼論云、別時意趣者、謂、觀懈怠不能於法精勤學。」とある。

(88) 懷感『釈浄土群疑論』（『大正蔵』四七、四〇頁中九～十二行・『浄全』六、二六頁下六～九行）に「又有一類衆生、善根深厚煩惱輕微。逢遇勝緣、聽聞淨教、深生淨信、發願修行臨終往生。具如經說。此是行願具足、即得往生。異彼空願之人。故非別時之教。」とあり。

(89) 「有_二」を「有_一」と読み替えた。

(90) 「言_二」を「言_一」と読み替えた。

(91) 裏にかくれたものと表に現れるもの。仏身における隠は法身、顯は報身、応身をいう。

(92) 『平等覚経』の引用文（注84参照）を指していると考えられる。

(93) 「いくらわずかでも善があるからといってそれにとらわれて修行を怠けるようなことがあってはならない。」という趣旨であると理解した。

(94) 『無量寿経』（『大正蔵』一二、二七五頁下九～一〇行・『浄全』一、二七頁五～六行）

(95) 原文では「須ひず」とあるが「須めず」とした。

(96) 『楞伽阿跋多羅宝経』（『大正蔵』一六、四八七頁中一～二行）

【補註】

（補註1）㊦「前後發意衆生、欲生阿彌陀佛國者皆深著懈怠國土不能前進生阿彌陀佛國億千萬衆時有一人能生阿彌陀佛國何以故皆由懈怠」

㊧「前後發意衆生欲生阿彌陀佛國何以故皆由懈怠」

（はっとり じゅんけい 学術研究員、佛教大学大学院）

其因卽不得生望其道理一切容生生者便
少故言夢也

第二正果決定者大經三輩觀經九品並云
行者臨命終時見佛來迎或見蓮華或夢中
見佛或有不見者卽於七寶池中蓮華之上
自然受身於中勝者生卽花開劣者不開此
人或經五百歲或十二劫蓮華乃敷於華胎
中受諸快樂如忉利天而不見佛亦不聞法

決定往生集

決定往生集

故於彼國謂爲胎生如雙卷經說之良以此人修因

之時疑惑不了故受胎生故經說言不了佛

智不思議智於此諸智疑惑不信然猶信罪

福修習善本願生其國此諸衆生生彼宮殿

壽五百歲常不見佛云云平等覺經云同本異譯也

其中輩者不出家斷欲而修造寺等福耳齋戒清淨慈心精

進斷欲念欲往生無量清淨佛國一日一夜

不斷絕者其人於今世亦復於臥睡夢中見

無量清淨佛其人壽欲盡時無量清淨佛則
化令其人自見佛及國土往生無量清淨佛
國者可得智慧勇猛佛言其人奉行施與如
是者若其然後中復悔心中狐疑不信分檀
布施作諸善後世得其福不信有無量清淨
佛國不信往生其國中雖爾其人續念不絕
誓信誓不信意志猶預無所專據續結其善
願爲本續得往生其人病壽命欲終時無量

三

大正三三

清淨佛則自化作形像令其人目自見之口
不能復言。便心中歡喜踊躍。意念言我悔不
知益齋作善。今當生無量清淨佛國。其人卽
心中悔過。其人壽命終盡。則生無量清淨佛
國。不能得前至無量清淨佛所。便道見無量
清淨佛國界邊。自然七寶城中。便大歡喜
道止。其城中卽於七寶水池蓮華中化生。則
受身自然長大。在城中於是間五百歲。其城

廣縱各二千里城中亦有七寶舍宅舍宅中自然內皆有七寶浴池浴池中亦有自然花繞浴池上亦有七寶樹重行皆復作五音聲其飲食時前亦有自然食具百味食在所欲得其人於城中快樂其城中比如第二忉利天上自然之物其人於城中不能得出復不能得見無量清淨佛但見其光明心中自悔責踊躍喜耳本宿命求道時心口各異言念

決定往生集
卷之二
決定往生集

無誠狐疑佛經復不信向之當自然入惡道
中無量清淨佛哀愍威神引之去耳其人於
城中五百歲乃得出往至無量清淨佛所聞
經心不開解亦復不得在諸菩薩阿羅漢比
丘僧中聽經以去所居處舍宅在地不能令
舍宅隨意高大在虛空中復去無量清淨佛
甚太遠不能得近附無量清淨佛其人智慧
不明知經復少心不歡喜意不開解其人久

久亦自當智慧開解知經明健勇猛心當歡
樂次當復如上第一輩云云中輩如是下輩
上輩人應過度人道經同之本元曉云生邊
見經文一地者則是一類非九品攝又一師云邊地卽
是中品下品今存後義清淨覺經說中下兩
輩有此邊地故故十住論偈云若入種善根
疑卽花不開信心清淨者花開卽見佛又一
切經中彌陀佛偈云有疑在胎中不合五百

參
二
一

尺
三
五
三
三
三

二
一

二
一

王

決定往生集

卷三

牟不疑生臺座又手無量前已上言不合者多本同爾今案
不會聖衆故言不合當對不疑者又手佛前也二文相對卽以花爲
胎故知胎宮卽中下輩也問大無量壽經說
胎生在宮殿中今何以花爲胎生耶答無量
壽會文云彼等衆生處花胎中猶如苑園宮
殿之想云問時有差別胎生經五百歲九品
中或六劫十二劫或七日七七日既爾如何
得相攝耶答大經三輩觀經九品同異稍多

然許相攝胎宮一事不足爲奇夫往生之類
榮降無量文中互舉出沒爲異言雖不同義
實不違也今依此經疑惑中悔應入地獄者
由佛威力強得往生雖生淨土薄福小智不
能近佛不識經法如此果報何不及乎問若
疑心者亦得往生何故三種決定之中唯取
信心爲決定耶答信是決定義故約信明決
定應知此人雖生疑悔於暫信時定業已成

珍海

決定往生集

卷

故經說言暫信暫不信也良以此人有得有
失由信故往生由疑故在胎問菩薩處胎經
云西方去此閻浮提十二億那由他有懈怠
界國土快樂作倡伎樂衣被服飾香花莊嚴
七寶轉開牀舉目東視寶牀隨轉北視西視
南視亦如是轉私云自所座牀隨迴願而轉也意欲顯示其中衆生於諸
妙境久久受用而無勞倦也前後發意衆生欲生阿彌陀
佛國者皆深著懈怠國土不能前進生阿彌

陀佛國億千萬衆時有一人能生阿彌陀佛
國何以故皆由懈怠執心不牢固云云準此經
說願往生者千萬衆中乃有一人得生餘則
不能生若爾何得言決定往生耶答先來多
云若生懈怠後時決定轉生極樂故彼經次
文云斯等衆生自不殺生亦教他不殺有此
福報生無量壽國已禪林云設邊地於極樂
爲引疑惑之輩假化城於懈怠以攝雜修之

珍海

決定往生集

卷五

者於易往土心不怯弱只作決定往生之想
云此借法花化城喻義以解極樂中途懈慢
意取第三生以明決定又懷感禪師依導和
尚云執心牢固者定生極樂又云專修之人
千無一失云準此文意懈慢之人未生極樂
問凡夫行者專修難得故千万衆中乃有一
人生故今世人多是失乎答若約次生失而
非得約第三生得而非失又雙卷記判胎生

者以爲其失而被既生不可言失且約九品
論得失耳總論得失各有三種類得中三者
卽三輩也失中三者如平等覺經等說聞而
生謗以爲上失墮地獄故生懈怠國爲中品
失疑心胎生爲下品失第二疑心胎生今案
此義不同先意應知所言懈怠國者卽是極
樂之邊地也所言執心不牢固者卽是暫信
暫不信義胎生之人疑惑中悔卽懈怠過又

王

決定往生集

卷

疑惑之人應入惡道佛既引之懈慢之輩將
生極樂佛何捨之故知懈慢卽是胎生宮故
順次生爲決定也問極樂去此十萬億刹懈
慢卽過十二億那由他去此道數不同者何
答直於極樂去此遠近經經乃異如云過十
萬億佛土又云百千俱胝那庾多國又云千
億萬國豈以道數有異說故便爲別土哉今
懈慢界既出別經傳者不同不勞小事若依

語言懈慢、優遠以十俱胝爲那由他、卽十二
億那由他者、望十方億其數乃多、何可言往
極樂中途者哉、欲明此義、先須應知言十萬
億者、以一四天下爲一國、而數之、故平等覺
經云、西方是去、是閻浮地、界千億萬須彌山
佛國、過度人道、經同之以閻浮提、對須彌山
故知、但約四天下也、又說懈慢國云、去閻浮
提十二億那由他、不言去娑婆、故知亦據四

入少安
一尺三寸三分

決定往生集

決定往生集

決定往生集

天下國也又十萬億與百千俱胝言有異者
十萬當百千也億者當俱胝也人師云西方
數法億有多位一者十萬為億又落二百萬為
億又度落三者千萬為億俱胝四万万為億他
故以百千俱胝亦名十萬億也而言百千俱
胝那由他者此那由他只是總數非別數也
又言十二億那由他者應過十萬億也此中
意云入極樂界在此邊地別指其地故云爾

也問說懈慢云修不殺業有此福報生無量
壽國云豈得生已復更生耶答說從胎出名
爲生也如大樂玄云蓮華中退大心出生之
後取小果也又一義云修不殺者在娑婆時
慈心不殺言生無量壽國者卽懈慢界是無
量壽佛之國土也或卽此國人民壽無量故
名無量壽國卽舉不殺因顯長壽果也問若
生懈慢卽已生阿彌陀國者何故經言不能

進_テ生_ス阿_カ彌_カ陀_カ國_ニ耶_カ答_カ稽_カ留_カ邊_カ地_ニ不_レ近_カ佛_カ所_ニ故_ニ
云_フ不_レ進_ス生_ス佛_カ國_ニ耳_ヲ如_シ說_テ胎_カ宮_ニ云_フ不_レ能_ル前_ニ至_ス無_レ
量_ノ清_カ淨_カ佛_カ所_ニ也_ヲ應_ル知_ル彼_カ國_ニ有_ル多_ク界_ノ地_ニ如_シ印_カ度_ニ
國_ニ中_ニ更_ニ有_ル多_ク國_ニ或_シ以_テ一_ノ城_ノ名_ヲ國_ニ等_ニ也_ヲ衆_ノ寶_ノ國_ニ
土_ニ一_ノ界_ノ別_ニ或_シ黃_カ金_ヲ爲_ス地_ニ白_カ銀_ヲ爲_ス地_ニ或_シ復_ニ二_ノ
寶_ノ多_ク寶_ノ轉_ニ其_ノ合_ニ成_ス導_カ和_カ尚_ニ云_フ有_ル無_レ量_ノ寶_ノ幢_ノ各_ノ
擊_ツ一_ノ界_ニ云_フ若_シ擬_ス娑_カ婆_ニ如_シ百_ノ億_ノ四_ノ天_ノ下_ノ等_ノ彼_ノ
國_ニ亦_モ爾_ヲ但_モ彼_ノ以_テ金_ノ繩_ヲ等_ニ界_ノ之_ノ無_レ別_ノ輪_ノ圍_ノ山_ノ由_テ

此義故雖生彼國亦得說言不生者也問感
師云無佛來迎者墮懈慢界云云而胎生人有
佛來迎故知是別何故得爲一耶答平等覺
經說胎生云佛亦不使爾身諸所作自然得
之皆心自趣向道入其城中云云準此說文胎
生懈慢則無別也去此界時實由佛引到邊
地一時佛即放捨以至佛國
故又導和尚觀經疏云第三卷釋地想觀
中心無疑之文也修
因正念不得雜疑雖得往生含花未出或生

王

決定往生集

卷二

邊界或墮宮胎或因大悲菩薩入開花三昧
疑障乃除宮花開發身相顯然法侶攜將遊
佛會也云今見此文胎宮懈慢因果雙舉謂
雜修者名為懈慢禮讚云雜修不至疑者即
胎生因故知今言雜疑者並舉二說雖是二
說潛合為一含花未出者總舉果失或生邊
界者即懈慢也或墮宮胎是疑心人此亦雙
舉二說而義潛一言雖得往生者即顯懈慢

既生極樂者爾先賢既自辨解慢之德失末
學勿更迷往生之難易也問經說極樂衆生
相云皆受自然虛無之身無極之體咸同一
類非人非天形具相好如佛無異身帶神通
自在無礙如今凡夫不久修相好業何由忽
備諸相又不修習四禪定何能速得神通又
彼衆生壽等虛空自非別願無有中夭如今
衆生不修淨戒不護生命何忽感其報耶答

參

決定生土集

下

決定往生集

迹才云是化生之處非極妙也云意云此方
亦有化生故非極妙以是化生故云自然又
由念佛故具相好身及無量壽如諸天子初
生之時始所見者優成身色行者亦爾始入
佛法聞淨土教念佛如來常我之德而起淨
業優得淨土似佛究竟常樂我淨應知西方
此土有其四榮四枯四枯者是無常苦無我
不淨四榮卽是常樂我淨夫娑婆世界一期

壽命猶如電光彼土衆生芥城爲日夜塵沙
爲大期故此土爲無常境彼國爲常住處又
此方中衆苦充滿甚可怖畏現則八苦逼此
身後則三途迎我報貴賤無簡賢愚同然彼
土衆生無有衆苦但受諸樂溫和是春花鳥
悅目清凉亦秋風水適情法音在耳法喜滿
胸彼樂此苦同日言之耶又此土衆生身心
累礙皆非自在步勞咫尺之中心闇瞬息之

(21丁左)

彼淨此穢對不識乎既云淨土又名極樂樂
淨顯名何尋其義壽曰無量身是自在常我
備體誰迷彼德四枯四榮可厭可欣淨業因
此必得成就由此淨業果報亦淨此是近佛
故似佛四德也然復疑心胎生之人初生之
時所受境界或如第二忉利天或如夜摩天
處於宮殿夜摩天者見世俗凡夫豈非分耶
第三昇道決定者雙卷經云惡趣自然閉昇

金

大定住生集

三

道無窮極_云若生彼國娑婆五道自然離之
離五道因故_云閉也得道懷廣故無極也又
纔託其地便得不退故雙卷經_云其有衆生
生彼國者皆悉住於正定之聚_云正定卽是
不退異名又小經_云欲生阿彌陀佛國者皆
得不退轉於阿耨菩提_云準此等文彼土衆
生決定成就無上菩提豈唯彼土決定菩提
卽此界中已得決定所以然者生彼國者壽

命無量卽生必至一生補處見本願也於此世界
求淨土者決定往生故亦不退初心菩薩若
住此界於大菩提則不決定故起信論云初
學之人恐怖退失得生淨土終無有退常見
佛故意取應知經言願欲生時已不退者決定
應生不退處故稱讚淨土經云如說行者一
切定於阿耨菩提得不退轉一切定生極樂
世界鈔略又觀經說下品生人生彼國已七七

決定往生集
決定往生集
決定往生集

日蓮華乃數遇觀世音發菩提心經十小劫
方入初地淨影釋云彼土三小劫當此方一阿僧祇劫而十小劫良極長也
或經六劫蓮華乃數聞法發心發心種性也或十
二大劫花開聞法發菩提心發心同前此三即下品三生
也此等衆生生彼國已經久乃發大菩提心
入不退位世俗凡夫常沒之類寧可於中自
憚非分故觀經云亦令未來世一切凡夫欲
修淨業者得生西方極樂國土云龍樹天親

並勸一切衆生其生極樂龍樹十二禮
天親往生論曇鸞

法師往生論註云問迴向章中言譬其諸衆
生往生安樂國此指其何等衆生耶答無量
壽經云諸有衆生聞其名號信心歡喜乃至
一念至心迴向願生彼國卽得往生住不退
轉唯除五逆誹謗正法案此而言一切外凡
夫人皆得往生又如觀無量壽經下下品生
者或有衆生作不善業五逆十惡具諸不善

決定往生集

決定往生集

如此愚人，以惡業故，應墮惡道，逕歷多劫，受苦無窮。如此愚人，臨命終時，遇善知識，具足十念，稱南無無量壽佛，見金蓮華，猶如日輪，住其人前。如一念頃，即得往生極樂世界。於蓮華中，滿十二大劫，蓮華方開。當以此償五逆罪也。應時則發菩提之心，以此經證明，知下品凡夫，但令不誹謗正法，信佛因緣，皆得往生。已上註文

今案一義五逆報果臨終之時轉重輕受謂十念頃於身四大有少相擊爲惡業果若生

淨土ニ唯有ニ相似ニ等ニ流果ニ耳ニ全ニ無ニ報ニ果ニ以ニ淨土ニ生ニ極清淨ニ故ニ更ニ無ニ苦ニ故ニ淨影釋云
中品下生是小乘中見道已前世俗凡夫下
品三生總通善趣及常没人未有道位難辨
階降ラ取意畧鈔善趣位中未得決ニ嘉祥疏云
善弱果強者下品之人都不修善而得大果
故云下劣凡夫得生淨土ニ導和尚禮讚云問
曰今欲勸人往生者未知若爲安心起行作
業定得往生彼國土也答必欲往生彼國土

者如觀經說者具三心必得往生至乃信知自
身是具足煩惱凡夫善根薄少流轉三界不
出火宅今信知彌陀本弘誓願及稱名號下
至十聲一聲等定得往生乃至一念無有疑
心故名深心云云既言具足煩惱凡夫直是常
沒世俗凡夫得往生也觀經疏云嘉祥雖未現
起而未斷之煩惱具足有之以勝劣業迴向
淨土命終得生也已上雖未現起者正可云
雖不現起也然望未來可

起且言_テ世俗凡夫生_ス上界時猶須_ク離_テ欲修_ス八
爲_レ未_ト也 禪定今此安養具縛凡夫能得_テ往生_ラ寧非_ヤ奇
哉答雖是極下賤薄之人而依佛力乃得往
生_ラ問先滅罪業方得_テ往生_ラ云何此_ノ人具_ス煩惱
細_カ耶答業麤惑細_カ以_テ業麤故先滅_ラ乃_ニ生_ス煩惱
得_テ往_ラ云 良_ニ以此人本是常沒鄰近善趣下
賤人故雖生彼國久久花開聞法發心後方
入_ル位問下輩之人在花胎中經久徒然豈非_ヤ
無益乎答在花胎中依_テ十信行修練其心則

非無益問若爾十信得海印等諸三昧門於
十方界能現作佛何故在胎不見佛耶答在
花胎中雖修十信而初生時未能具足後經
多劫方可修滿又花開早翹依業報言三昧
神通多依內心如此界人修習神通變化異
形飛上他界若約果報即不能爾彼土衆生
二義亦然問若生彼國久久花開漸入道者
何故天親往生論云修五念門自利利他速

得成就阿耨菩提乎答若不修此五念門者
猶住穢土不能決定得大菩提若修此行便
生淨土終無退轉定得菩提故云速疾又生
彼土住不退故依三昧門陀羅尼門速得菩
提不逕長劫如智論說三昧陀羅尼故能作佛也云若住此界
不能如是相對可知昇道如是

第四種子決定者此有二義一者中道佛性
爲成佛因亦名正因亦名本覺衆生本來有

此覺性由此性故必得解脫道理雖然若無
聞法發心等緣此性不能自然解脫今遇釋
迦說西方教聞而奉行內有佛性待此外緣
因緣具足必應出離又生處有終今生以爲
終菩提有始淨土卽爲始良以有一夕之眠
則有一朝之覺有長夜之昏寢則有朗然之
大寤衆生身中既有作佛之理我等身中寧
無往生之理乎二者西方行者必有宿善故

雙卷云若人無善本不得聞此經清淨有戒者乃獲聞正法曾更見世尊則能信此事又念佛三昧經云於諸佛所久修善根乃得聞此三昧王名鈔平等覺經云其世間帝王人民善男子善女人前世宿命行善所致相祿テ適當テ聞無量清淨佛聲發心歡喜我代之喜云安養行者宿善既大甚可自愛努力莫輕自知宿福甚幸何疑當來勝利問有聞西方

淨土教門誹謗毀訾而不修行或雖不謫五
欲纏心不願往生如是之類豈有宿善何言
必有宿善乃得聞淨土教耶答此二類人聞
如不聞誠如所言無有善本而言有者據信
樂耳感師意也更有二類一者與阿彌陀佛有宿
願緣聞淨土教願求淨土而復懈怠更造十
惡或重病失心或不逢善友但是空願未有
修行望前二類有遠生義經歎說生論師釋

爲別時意趣更有一類煩惱輕微願行具足
卽得往生非別時意此卽感師前文殘也別時意者攝大乘論四意趣中又一種也意云經約別時得往生故說生淨土非卽生也感師解云約第三類判爲別時若約第四便就後二中前人有宿緣而非別時更可悉之不修行者餘緣障故宿緣少故後遂得生猶有勝利此第三類若遇勝緣或自覺發勤勵之者亦可得同第四類也故感師云或得重病不遇善友不得往生準此釋文旣置或言

王

決定往生集

九

則第三類人非定不生先雖懈怠或重病等
而或遇善友或自發覺改悔前過或得往生
卽同第四如觀經說下品生也又一義云若遇善友發悟
生者只是第四今取不卽生以爲第三類又
第三人若有願生淨土者先來所修世間善
業自爲業因又願求心卽修心往生又卽此
心相應思業既爲行業而言但是空願未有
行者當是隱顯言耳問現今學者有云若於
以行業微但名類也過去曾發道心以爲善本者現雖少念得生
淨土若過去世無大善者今雖勤修不能往

生者此義可爾耶答此義不然前所引經其
義分明但是念佛人皆有宿善故然感師意
第三類人有宿願緣而不即生者應是前生
一往聞教而心極劣是故今世不能勤勵亦
不即生但是今生勤勵之者皆得往生故知
念佛勤求淨土定得往生必有善本爲種子
也又前有微善今得聞經此身修因後生淨
土凡因緣理自微至著勿執宿善而廢今業

王珍海

決定往生集

〇

故經說言雖一世勤苦須臾之間後生無量
壽國快樂無極云既言一世勤苦不必須宿
善也應知由前結緣今聞彌陀今始修因次
生淨土此是智論小因大果亦即瑜伽功少
利多又楞伽經云聞說淨土相時其心即爲
佛性經名外刹殊勝也今聞淨土殊勝之相如觀經雙卷經
也等隨其文句次第生心所說國土粗現心想
如世人共會說他國事聞者相領也經中既

以聞淨土教一往領解判爲佛性何不以此
爲淨土種勿自疑宿善之有無更失往生大
利種子之義略以如斯

第五修因決定者委有六門一總明修因二
別明菩提心三明往生正業四明修行相五
明稱名益六明念分齊

第一總者觀經記云依涅槃經一切善業皆
淨土因麤要有四一修戒爲因遠離十惡修